

宮崎県文化財調査報告書

第 2 0 集

昭和53年3月

宮崎県教育委員会



宮崎県文化財調査報告書

第 2 0 集

昭和53年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては、開発工事等において偶然発見された遺跡について、緊急発掘調査等を実施して記録保存の措置をとっております。

今回は荒田遺跡他7遺跡について報告するものであります。

本書は、本県の古代史解明のための一資料として、研究に活用していただくとともに、年々失なわれていく埋蔵文化財について十分認識していただき、なお一層の御理解と御協力を願うものであります。

なお、この調査にあたり種々御配慮いただいた地元教育委員会ならびに発掘作業に御協力いただいた地元の方々に深甚の謝意を表します。

昭和53年3月31日

宮崎県教育委員会

教育長 四本 茂

例 言

- 1 この報告書は、宮崎県教育委員会が実施した緊急調査を主とした文化財調査の報告書である。
- 2 掲載しているのは、昭和48年度から昭和52年度までに調査したものの内、地下式古墳6、弥生遺跡1、箱式石棺1の合計8遺跡である。
- 3 本書の編集は宮崎県教育庁文化課が担当し、県文化財保護審議会委員石川恒太郎が監修した。

目 次

I	小峰町荒田遺跡発掘調査	1
	(延岡市小峰町7630番地)	
II	吹上地下式古墳発掘調査	11
	(東諸県郡国富町大字八代北俣吹上8190番地)	
III	切畑地下式古墳発掘調査	19
	(西諸県郡野尻町大字東麓字切畑小字星ヶ平)	
IV	新山場地式古墳発掘調査	33
	(小林市大字真方5498番地)	
V	雀ヶ野地下式古墳発掘調査	43
	(北諸県郡高城町大字四家408番地)	
VI	牧ノ原箱式石棺発掘調査	57
	(北諸県郡高城町大字大井手3481番地の1)	
VII	平松地下式古墳発掘調査	67
	(えびの市大字島内字平松1135番地)	
VIII	築池地下式古墳発掘調査	79
	(都城市下水流町字築池2579番地)	



I 小峰町荒田遺跡発掘調査

延岡市小峰町7630番地

県文化財保護審議会委員 石川恒太郎

本文目次

I 発見の動機	1
II 地形と住居跡	1
III 出土遺物	1
IV 遺跡の年代	2

挿図目次

第1図 小峰町7630番地の地層断面図	3
第2図 小峰町荒田内住居跡実測図	4
第3図 出土土器実測図	5

図版目次

図版 出土土器	7
---------	---

I 発見の動機

延岡市小峰町7680番地の標高約40mの丘上に、土地の所有者である甲斐満古氏が牛舎を造るため、昭和52年4月表土を削って平坦にしたところが、川原石が並べたようになっている所があった。たまたま県文化財保護推進員の甲斐常美氏がここを通りかかって同年4月12日県教育庁文化課に報告してきたので出張調査を委嘱されたが、その日は雨天であったので、翌13日甲斐常美氏や同市教育委員会の文化財担当の牧野義英工事と現場を調査した。

しかしこの地方の丘地は、五ヶ瀬川の河成段丘で、砂岩の上に厚さ1m内外の礫層が覆い冠さっているので、これは自然の礫層が現われているものであることが明らかとなった。しかし礫層の上には90cm内外の褐色の土層があり、その下に80cm内外の薄い表土があるので、或いは何らかの遺構があるかも知れないと思ったので、表土を削がしたところが多数の土器片を発掘し、ここに古代の住居跡があることを確認した。それで翌14日の午前中までに住居跡の形を出したが、午後から雨となったので引揚げた。

II 地形と住居跡

現地は小峰町の中ではあるが、天下(あまり)町に近い所で、五ヶ瀬川が西階の丘地に阻まれて大瀬、五ヶ瀬の2流となって南北に分流しているが、北流する五ヶ瀬川の左岸で、東に五ヶ瀬川が南から北に流れており、その左岸に経塚山というピラミットを小さくしたような国指定の第40号古墳(横穴)があり、現場はこの古墳から西方約500mの丘上で、南方古墳群のある地域で、西に丘地が続き、東に延岡平野を望む絶好の地形上にある。

住居跡は丘地の頂上部にあるが、西側は今回の牛舎建設のために削られ、北側は山路によって半ば削られており、この道路が所有地の境界であるため、道路(山道)の北方を発掘することはできなかった。それで住居跡の残存する形は東西に長い長方形であるが、原形は4m²ぐらいの隅丸方形の床面をもつ家であったものと考えられる。何分にも丘地の頂上部にあるので自然の覆土による破壊に加えて、所有者が花木などを植え込んだ際にも破壊されて、幸うじて住居跡の存在を確認し得る程度で、柱穴も発見することはできなかった。

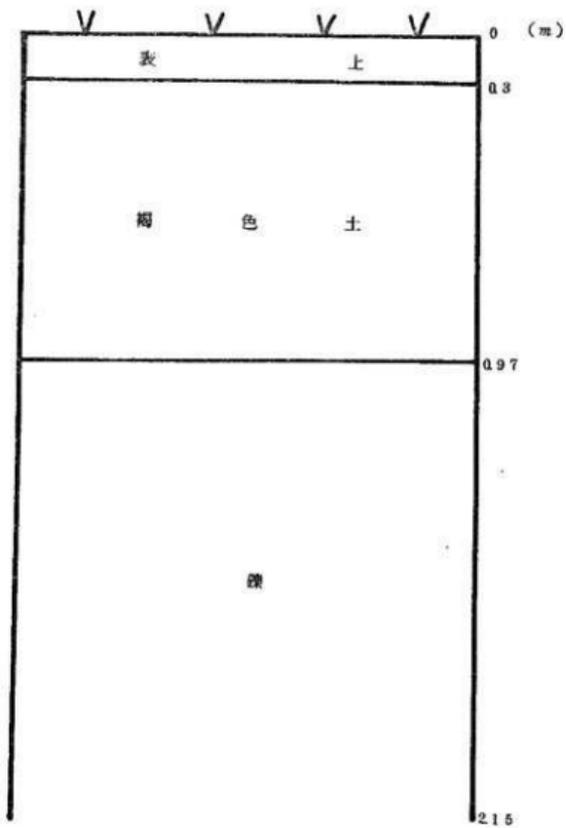
III 出土遺物

遺物は土器の破片のみであったが、これらの破片を接合してみると、図版や第8図に見られるように、10個以上の土器の破片で、そのうち9個は盤形(さらがた)で1個は大きい壺形の破片であった。盤は食物を盛る器であるが、9枚もの盤が在ったことは、ここに古代の人が住んだことを示すものと思われる。第8図は土器の完形図を示したものであるが、(1)は口径約9.5cm、底径約7cm、で高さ約3cm。(2)は口径約10cm、

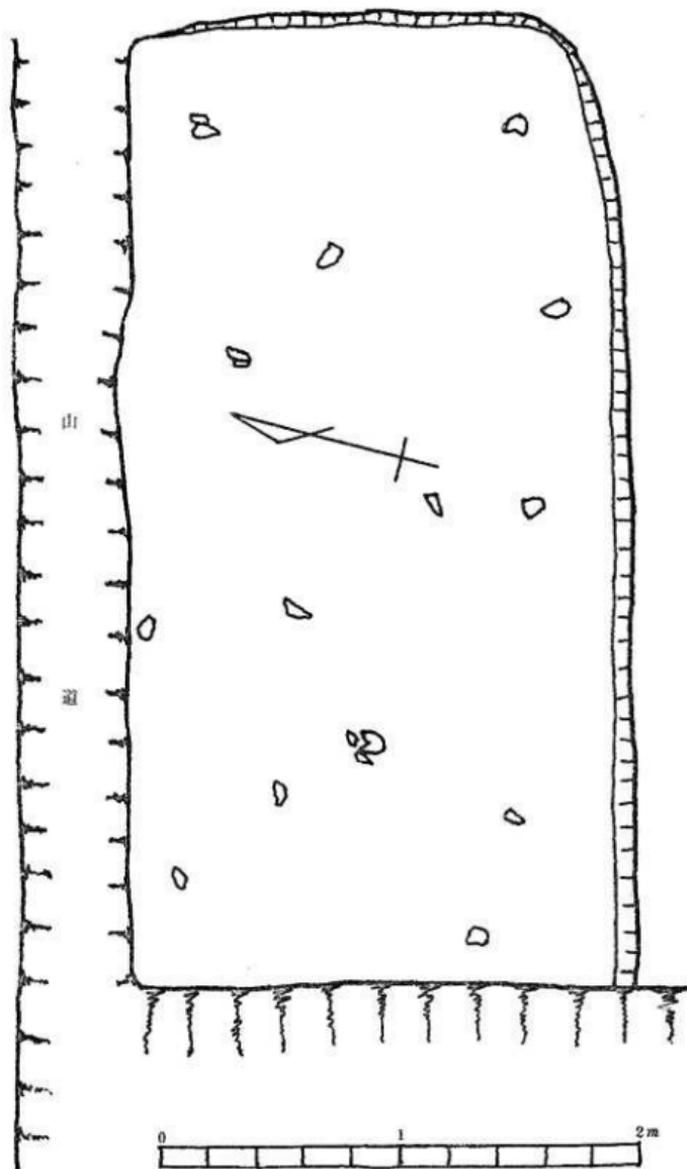
底径約7 cm, 高さ約3.5 cm。(3)は口径約10 cm, 底径約8 cm, 高さ2.5 cm。(4)は口径約10 cm, 底径約7 cm, 高さ約2 cm。(5)は口径約10.5 cm, 底径約7.5 cm, 高さ約3 cm。(6)は口径約9 cm, 底径約6.5 cm, 高さ約2.5 cm。(7)は口径9 cm, 底径約7 cm, 高さ約3 cm。(8)は口径約9 cm, 底径約6 cm, 高さ約2.5 cm。(9)は口径1.8 cm, 底径2.5 cm, 高さ4.5 cmである。これら9個の土器は黄褐色の土器で円形の平底に口縁を付けた甍形であり、(1)と(9)は口縁がやや外反し、他は立っている。そしてこれらの土器は平たい内甍状の底を造って、その上に口縁をくっ付けたらしく、底と口縁とのつけ根に「ヒビ破れ」状の疵のあるものもある。胎土はみな細かい砂石の粒を含んでいる。(9)の土器は最も注目すべきもので、表面にかすかに刷目が認められるが、底の内側に指描きと思われる渦状文が描かれている。これら9個の甍形土器は土師器とも見られるが、第3図004に示した甍形土器の底部破片は、外側は赤褐色で内側は黒色を呈し、胎土にはかなり荒い石片を含んでいて、明らかに弥生式土器で、甍の底部で、平底の1部を残している。

Ⅳ 遺跡の年代

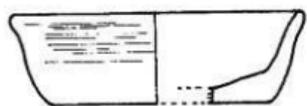
以上に記した出土遺物によって見れば、問題となるのは甍形の土器で、甍は土師器中期に出現する土器であるという説もあるが、これに似た平底の甍形土器は本県でも嘗て児湯郡川南町の把言田(はごんだ)遺跡から出土しており、静岡県登呂遺跡出土の木器にも似たものもあるし、作出の甍の破片と合せ考えれば、この遺跡の年代は弥生時代の終末期(8世紀頃)のものと考えられる。



第1図 小峰町7630番地の地割断面図



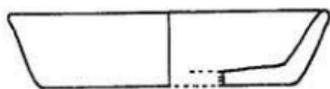
第 2 圖 小峰町荒田内住居跡実測図



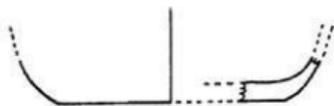
1



2



3



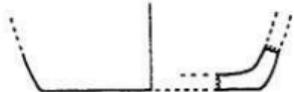
4



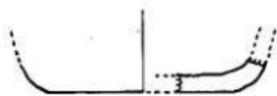
5



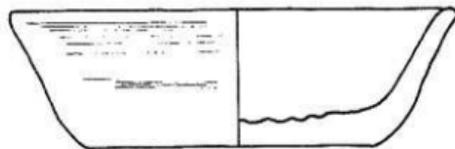
6



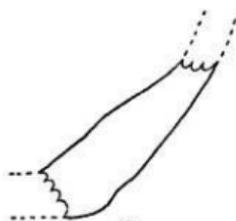
7



8



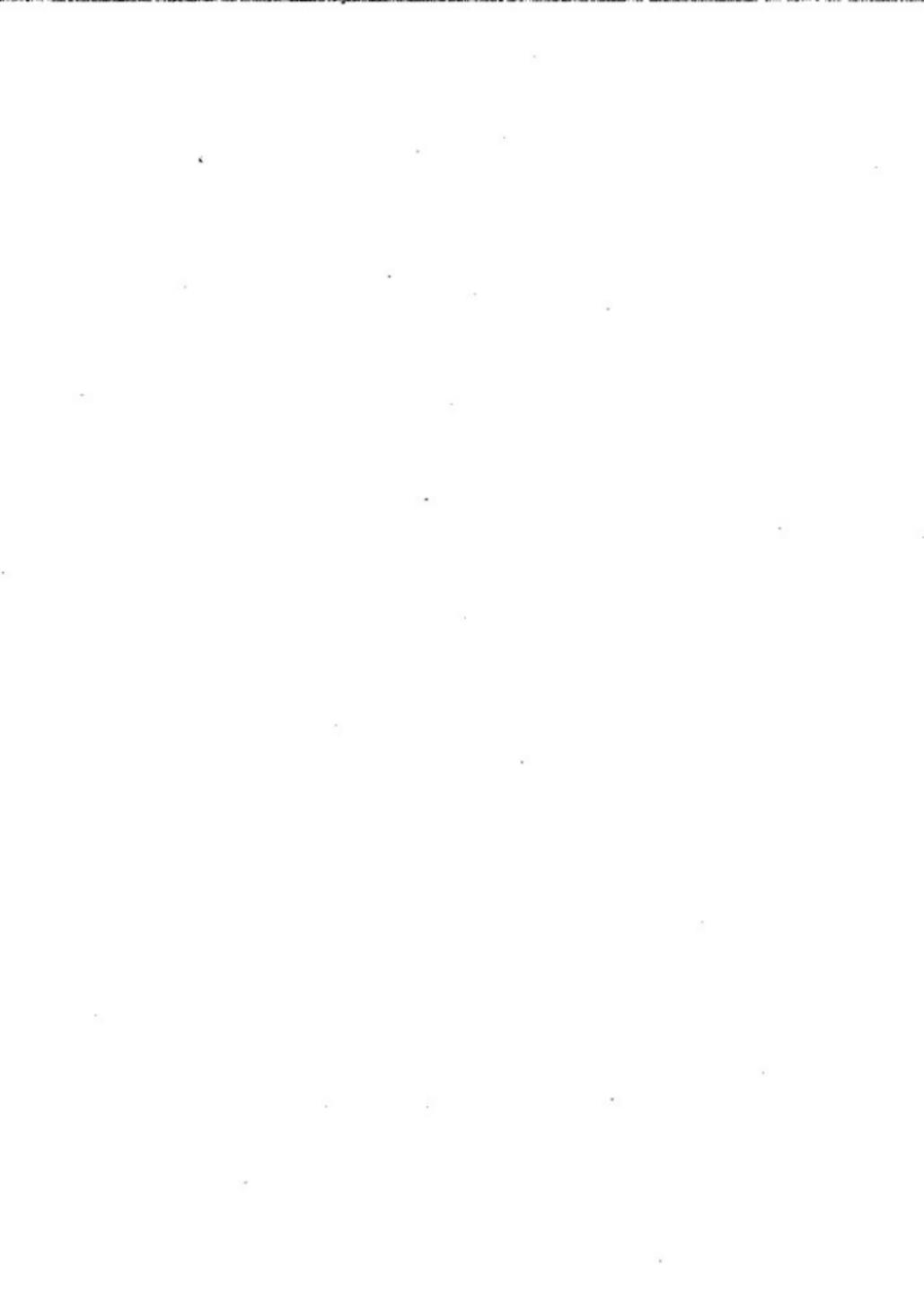
9

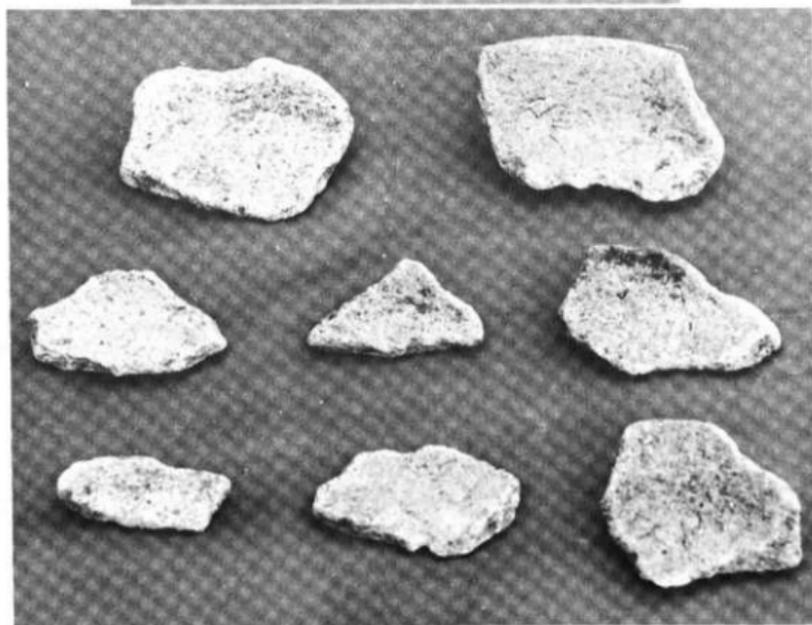
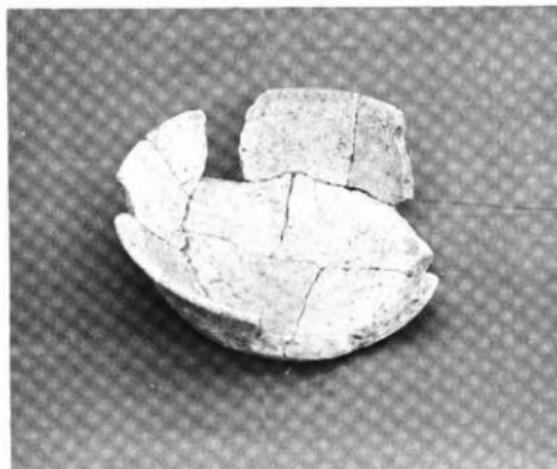


10



第 3 圖 出土土器尖刺圖





出土土器（口縁部）



Ⅱ 吹上地下式古墳発掘調査

東諸県郡国富町大字八代北俣

吹上3190

県文化財保護審議会委員 日高正晴
県文化課主事 岩永哲夫

本文目次

I 所在地	11
II 発見の動機と調査経過	11
III 調査の結果	12
IV まとめ	12

挿図目次

第1図 遺跡所在地	11
第2図 吹上地下式古墳実測図	14

図版目次

図版 地下式古墳の状況	15
-------------	----

I 所在地（第1図）

東諸県郡国高町大字八代北俣吹上 3190 番地



第1図 遺跡所在地（○印）

昭和17年から18年にかけて陸軍飛行場建設が行なわれたが、それに伴って同地の封土墳及び地下式古墳の三十余基が県により調査された。■

その中の地下式第3号（字吹上 3180）、第4号（字吹上 3180）の南方に今回調査の地下式古墳が位置している。第3・4号が六野原古墳として一連の号数になっているが、今回調査の地下式古墳は仮に吹上地下式古墳50-1号として記述する。

II 発見の動機と調査経過

現地は現在、みかん園になっていて、地主神谷仙次郎氏がみかん木に施肥を行なうため木の脇に溝を掘ったところ、穴があき、中に人骨が見えたということで、町教育委員会に届出があった。

町教委から連絡を受けた県教育委員会文化課は現地に日高正晴県文化財専門委員を派遣し、町教委社会教育係長宮川 久氏と共に現地調査をした結果、昭和60年8月19・20日の2日間発掘調査を行なうことに

なった。

Ⅲ 調査の結果

調査は、日高正晴、岩永哲夫が行ない、国富町社会教育指導員長友光男氏の協力を得た。

この地下式古墳は竪穴式前室を南西、玄室を北東にして設けられていた(第2図)。

竪穴式前室から玄室までの主軸の長さは8mである。

竪穴式前室はほぼ方形に近く、上面で長さ135~145cm、幅約120cmで、深くなるにしたがって狭まり、羨門付近で最も狭く約60cm、深さは地表から約150cmあった。閉塞石はなく、玄室内にまで土が流れ込んでいた。

羨道は東寄りで10cm、西寄りで20cmで非常に短かった。

玄室は、長さ145cm、幅247cmの半入りで、三隅は隅丸方形の形だが、北西隅だけは弧をなしている。天井は、東側は平らで高さ95cm、西側は丸く床まで続いている。東側壁はほとんど直上しており、きれいに整形されている。玄室内全体に見られる削り目の幅は65cmである。

埋葬物は人骨1体分のみであった。人骨は頭を西に向けて奥壁寄りに葬られ、頭蓋骨、歯、腰骨の一部、大腿骨などが残っていたが、保存は決して良くはなかった。頭蓋骨付近には朱が散乱していた。

Ⅳ まとめ

調査の結果をまとめると次の如くなる。

(1) 構造

① 全体形

玄室の中央に羨道がつく標準形

② 閉塞

竪穴式前室内全体を土をもって埋め、閉塞石等は竪穴式前室上部にも羨門部にも全くない。

③ 羨道

10~20cmで非常に短い。

④ 玄室

半入り型アーチ造り

(2) 人骨

奥壁寄りに1体であるが、身体には何ら着けていない。

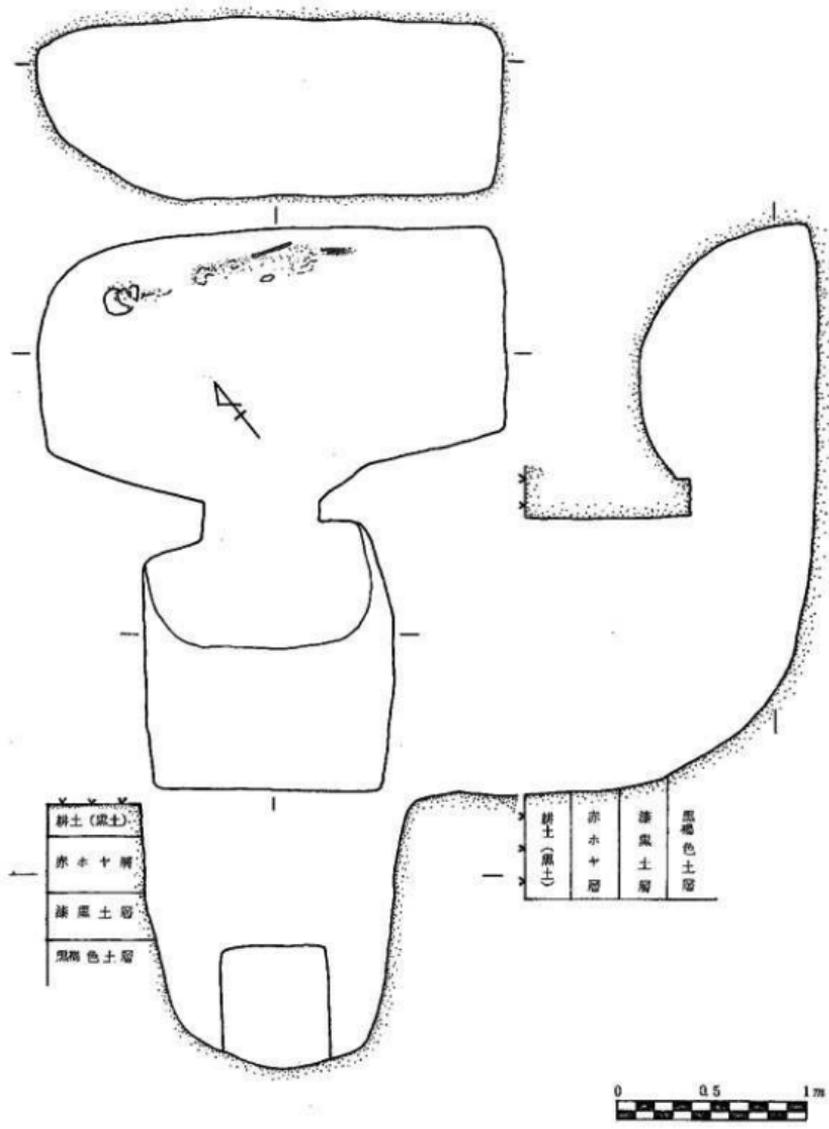
(3) 副葬品

なし

構築年代は、退化形式の1つであるので、古墳後期の中でも新しいものと考えられる。(岩永 哲夫)

(注) 史蹟名勝天然紀念物調査報告第18輯「六野原古墳調査報告」

昭和19年4月 宮崎県



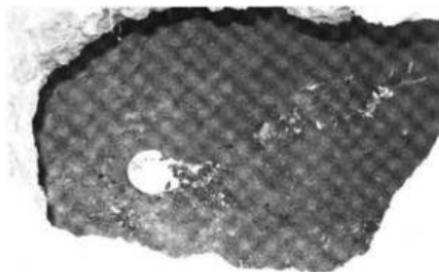
第2圖 吹上地下式古墳 50-1号尖副図



みかん園に所在する
地下式古墳(矢印)



竪穴式前室(手前)
玄室(後方)



玄室内の人骨



Ⅲ 切畑地下式古墳発掘調査

西諸県郡野尻町大字東麓
字切畑小字星ヶ平

県文化財保護審議会委員 石川恒太郎

本文目次

I	古墳の位置と発見の動機	19
II	調査の結果	19
1	第1号墳	19
2	第2号墳	20
3	遺物	20
(1)	第1号墳の遺物	20
(2)	第2号墳の遺物	21
III	結語	21

挿図目次

第1図	第1号墳実測図	23
第2図	第2号墳実測図	24
第3図	第1号墳副葬品実測図	25
第4図	第2号墳 "	26

図版目次

図版1	切畑地下式古墳の状況	27
図版2	1号地下式古墳副葬品	28
図版3	2号 "	29

I 古墳の位置と発見の動機

この古墳は西諸県郡野尻町大字東麓字切畑小字屋ヶ平にあり、同地の農業大畑時義民所有の畑地で、この付近では昭和47年にも2基の地下式古墳が発見されたということである。この畑は大淀川の上流岩瀬川の河川段丘上にあつて、標高160mぐらいのところであるが、昭和48年12月に大畑氏がブルドーザを雇つて基盤整備中に1基の地下式古墳が発見されたので、同氏は中に入っていた刀1振、剣1振、鉄鏃(平根式鏃形)3本と頭蓋骨1個を採集して同町教育委員会に届出た。しかるに同町教育委員会で、このような場合は、発見と同時に、中に手を触れることなく届け出るように注意されたので、同年12月24日に更に1基が発見されるとともに、同町教委に届出たわけで、町教委からの連絡で県教育庁で調査することとなり、12月25日県教育委員会の委嘱により、同行文化課の白石主事と共に同町に出張して調査した。なおこの調査には小林市の国学院大学学生山口和夫氏が参加した。第1号墳の実測図は同氏が実測したものを県教育庁岩水野夫主事がトレスしたものである。副葬品の実測は北郷泰道が担当した。

以上のような事情であつたから、われわれは発見順に前日発見のものを切畑地下式古墳第1号、後に発見されたものを同第2号と名づけて記録することとした。

II 調査の結果

1. 第1号墳

第1号墳はすでに遺物が取り揚げられていたが、竪穴式前室が出ていなかったで、その部分を掘り出した。この古墳は竪穴式前室を西南に、玄室を東北にして営まれていたが、古墳の中軸線は、南北の方向よりほぼ80度玄室が西に傾いていた。すでに前記のごとく、遺物は畑氏によって取り揚げられていたが、実測前に精査することとした。

竪穴式前室は四角形で、南北90cm、東西110cmで、南壁が長さ110cm、北壁は長さ98cmで、平面形は梯形を描いており、深さは145cmで底はやや羨門に向つて傾斜していた。羨門は入口が狭く玄門に向つて喇叭状に広がっており、羨門は巾60cm、高さ75cm、川原石をもつて閉塞されていたが、閉塞されている所は高さ60cm、中央の高さ45cm、巾は上巾、下巾ともに65cmであつた。羨門の長さは50cmで玄門の巾は70cm、天井は平らで、底は玄室に向つて傾斜していた。

玄室は竪穴式前室に対して直角すなわち平入りとなつており、東西の長さ208cm、南北の奥行180cmであつた。天井は壊れていたが、床面からの高さは残存部で140cmであつた。床面には何らの施設もなく、これを精査すると、北壁に接して壁に平行に刀1振があり、東壁に接して骨片が多く残っていた。そしてその近くの東壁に接して鉄鏃数本があつた。

2. 第2号墳

第2号墳は第1号墳の東方約5mのところであり、天井が1部落ちて人骨1体と剣1振が見えていた。これもまず竪穴式前室を掘り出すことにしたが、第1号墳とほぼ平行に、竪穴式前室を西南に、玄室を東北にして営まれており、古墳の中軸線は南北の方位に対して27度玄室が西に傾いていた。

竪穴式前室は四角形で、南北9.0cm、東西10.0cmで、西壁より東壁が短かく、西壁は長さ9.0cm、東壁は長さ8.0cmであった。地表からの深さは7.0cmで、底部は羨門に向かって傾斜しており、その傾斜は羨門部において1.5cm低くなっていた。

羨門は第1号と同じように川原石をもって閉塞されていたが、羨門の高さは6.5cm、巾8.0cmであったが、これを閉塞していた川原石は高さ8.5cm、上巾7.8cm、中巾6.5cm、下巾6.5cmであった。羨道の長さは5.0cmで、西方は正しい形であったが、東方は中くぼみになっていた。玄門の巾は8.3cmで、天井は平らで、底部は玄門に向かってほぼ平らで進み、玄門から急激に約1.0cm降っている。

玄室は長さ2.50m、奥行1.70mであるが、東壁は長さ1.40mで南側が長さ6.0cmにわたって1.0cmぐらい東に張り出している。北壁は長さ2.45mで中央が3.0cm北に張り出している。西壁は長さ1.50mで、床面から3.5cmのところを巾1.7cm内外の棚状施設がある。西壁は北端が南端より2.0cmも西に張り出している。南壁は長さ2.35mで、その中央の東端から西に8.5cm、西端から東に6.5cmのところを羨道が開口しているが、羨道より西側の南壁にも巾1.0cmから0cmに至る棚状施設が西壁から続いている。しかしこの棚状施設には何も載っていなかった。

玄室の床面は平らで何らの施設もなかったが、東壁に接して北隅と南隅に3体分の人骨が頭蓋骨を東に、足を西にして葬られており、南側2体の頭蓋骨に接して、その北側に東壁に直角に剣1振が柄を東に鋒を西にして、この両骨を覆るかのごとく置かれており、この剣の柄に直角に、その南側に2本の鉄鍬が、東側のものは刃を北に向け、西側のものは刃を南に向けて置かれていたが、ともに平根の鈍形であった。

天井は前に述べたように半ば破壊されていたが、西側は棚状施設があるので、その外側に屋根があり、東側は棚状のものがなくて床面上4.5cmのところを屋根が降っていた。これも西側と東側では1.0cmの差がある。天井の高さは1.10mを残していたから、これが天井の高さと見てよいであろう。

以上がこの古墳の概要であるが、この古墳でも特徴的なのは、地下式古墳にあっては玄室の一方の壁だけに棚状施設がある場合は、棚上施設の上に副葬品を載せ、その下に頭蓋骨を置き、足を伸ばして葬られているのが普通であるのに、この古墳においては棚状施設のない壁ぎわに頭蓋骨を置き、副葬品も棚状のものの上に置かずして葬っていることで、むしろ奇異の感を感じるのであるが、このような事実があるから、われわれはここにある棚状のものを「棚」と呼ばずして、ことさらに「棚状施設」と呼ぶのである。

3. 遺物

(1) 第1号墳の遺物

第1号墳の遺物は頭蓋骨1と剣2口、刀8口、鉄鍬5本と鉄片1個であった。

- (イ) 剣1は全長67.5cm, うち柄長17cm, 身長50.5cm, 柄幅2cmで柄部に鹿角装が一部残っている。胴幅4.5cm, 身幅3.9cm, 身の厚さ0.7cmで、鞘の木質が一部残っている。第3図(1)に示したのがこの剣である。
- (ロ) 剣2は柄部を折損している現長21cm, 身幅2cm, 身の厚さ0.4cmで第3図(5)に示したものである。
- (ハ) 刀1は全長75.3cm, うち柄長32cm, 身長65.5cm, 柄幅2cmで目釘穴が柄端から5cmの所に1個ある。身幅3cm, 棟厚0.5cmである。第3図(2)がこれである。
- (ニ) 刀2は柄部を折損しているもので、現長45cm, 身幅2.5cm, 棟厚0.5cmである。これには鉄鏃が1本鑿着している。第3図(3)に示したのがこれである。
- (ホ) 刀3は刀身の大部分を折損しているもので、現長17.7cm, うち柄長9cm, 柄幅1.8cmで柄端から5cmの所に目釘穴がある。身長8.7cm, 身幅2.8cm, これにも鉄鏃の破片のようなものが鑿着している [第3図(6)]
- (ヘ) 鉄鏃1, 現長14.8cm, 鏃形で身幅4.8cm, 厚さ0.5cm, 平根である [第3図(7)]。
- (ト) 鉄鏃2, 全長14.3cm, 遠の1部が残っている。平根鏃形で身幅3cm, 厚さ0.4cm [第3図(8)]。
- (チ) 鉄鏃3, 身の先端を欠き, 現長7.5cm, 平根鏃形で身幅約3cm, 厚さ0.4cm [第3図(9)]。
- (リ) 鉄鏃4, 平根鏃形であるが鏃部を折損している。現長6cm [第3図(10)]。
- (ル) 鉄鏃5, 刀2に鑿着しているもので平根鏃形, 現長7.5cm, 身幅約3cm [第3図(3)]。
- (2) 第2号墳の遺物

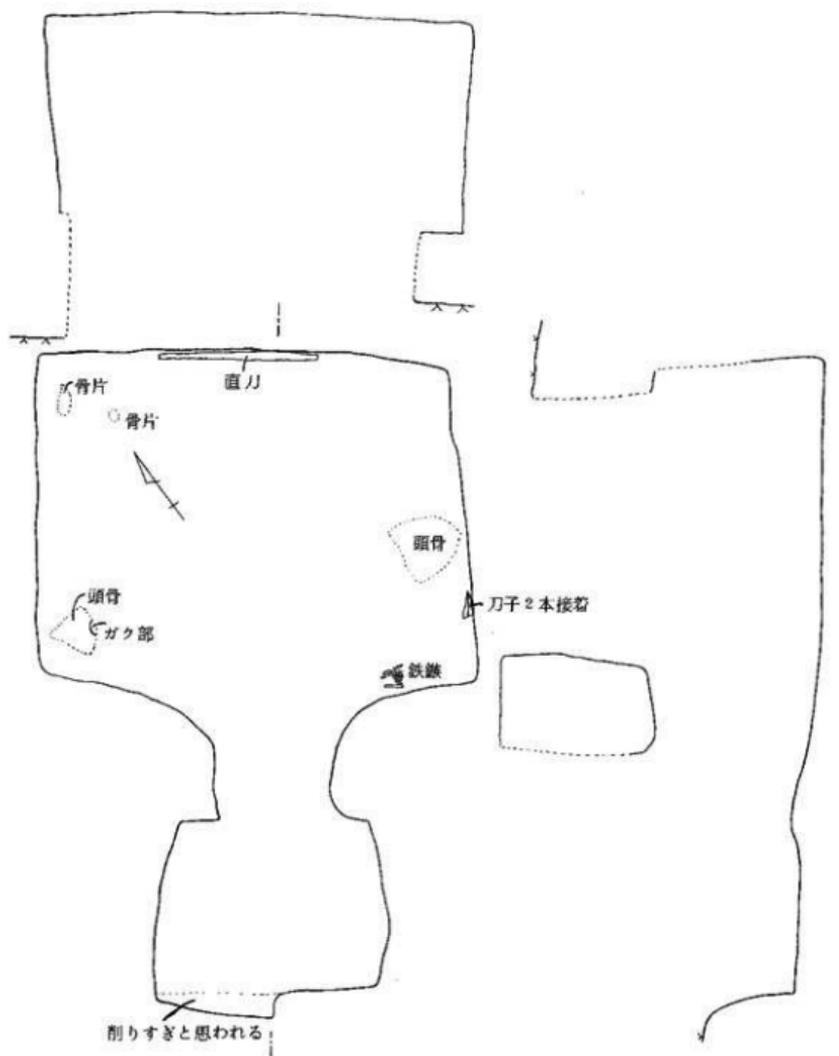
第2号墳の遺物は人骨8体分と剣1口, 刀子2口であった。

- (イ) 剣, 全長48cm, うち柄長12cm, 身長36cm, 柄幅2cm, 銅元に鹿角装が施されているが、これは幅3cm, 長径4.5cmの楕円形をなしている。身部も鞘の木質が残っており身幅は3.5cm, 厚さは計り難いが鞘の1部に布の痕を止めている [第4図(1)]。
- (ロ) 刀子1, 全長15cm, 柄長4.5cm, 身長10.5cm, 柄幅2cm, 身幅1.5cm, 棟厚0.4cm [第4図(2)]。
- (ハ) 刀子2, 全長14.5cm, うち柄長7cm, 身長7.5cm, 柄幅木質とも2cm, 身幅2cm, 棟厚0.5cm [第4図(3)]。

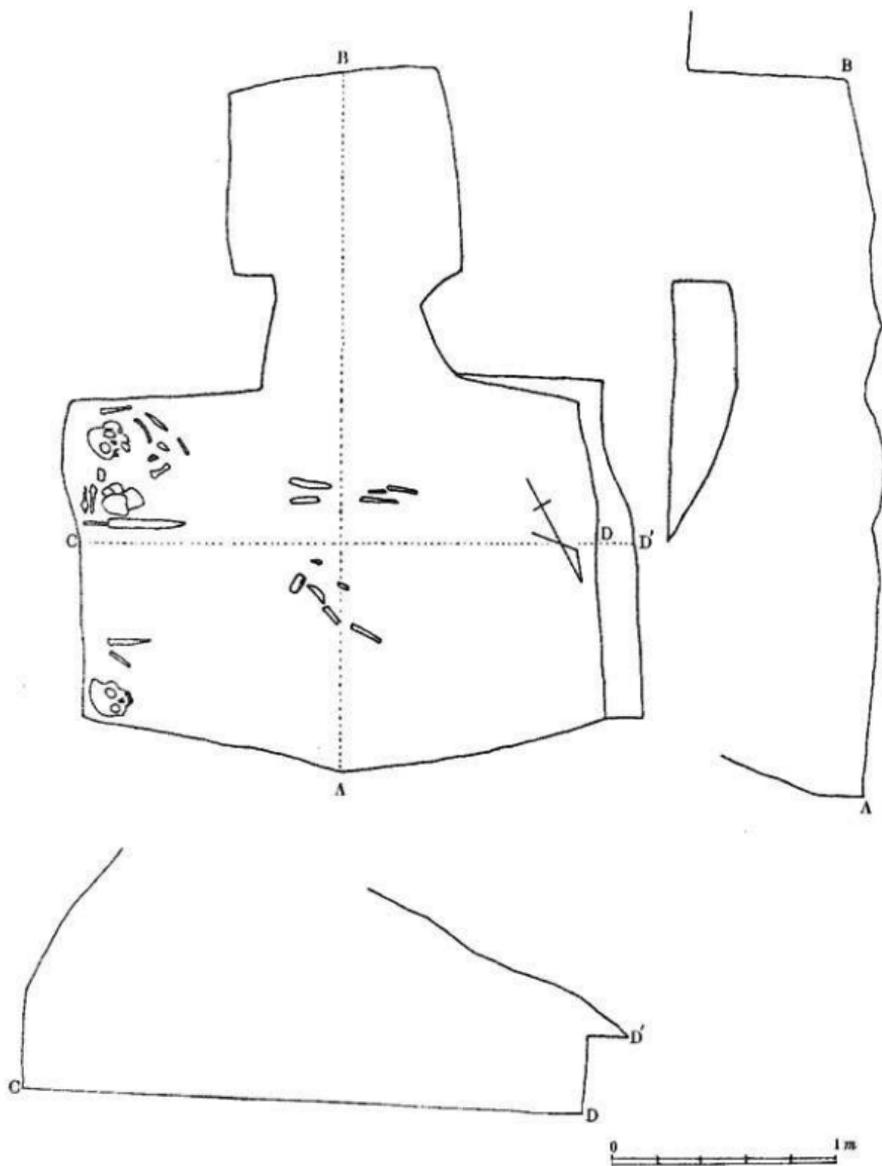
Ⅲ 結 語

この地下式古墳は天井部を破壊して発見されたため玄室の構造を充分に知ることができなかったが、第1号も第2号も、ほぼ同じ形態であったことが察せられ、第2号によって天井は寄棟造りで羨道は平入であることが知られ、特に変わった点は、第2号墳は玄室の西壁と南壁の1部に棚状施設を造りながら、副葬品は1つも棚にはなく、頭蓋骨の付近に置かれていたことである。しかも第2号の剣と鉄鏃(矢)とが、そこに葬られている人骨を守るかのような位置に意識的に置かれていると思われるように存在したことは、死者に対する埋葬者の呪術的な信仰を示すもののように感ぜられる。副葬品の鉄鏃はみな平根を用い、剣には布痕が

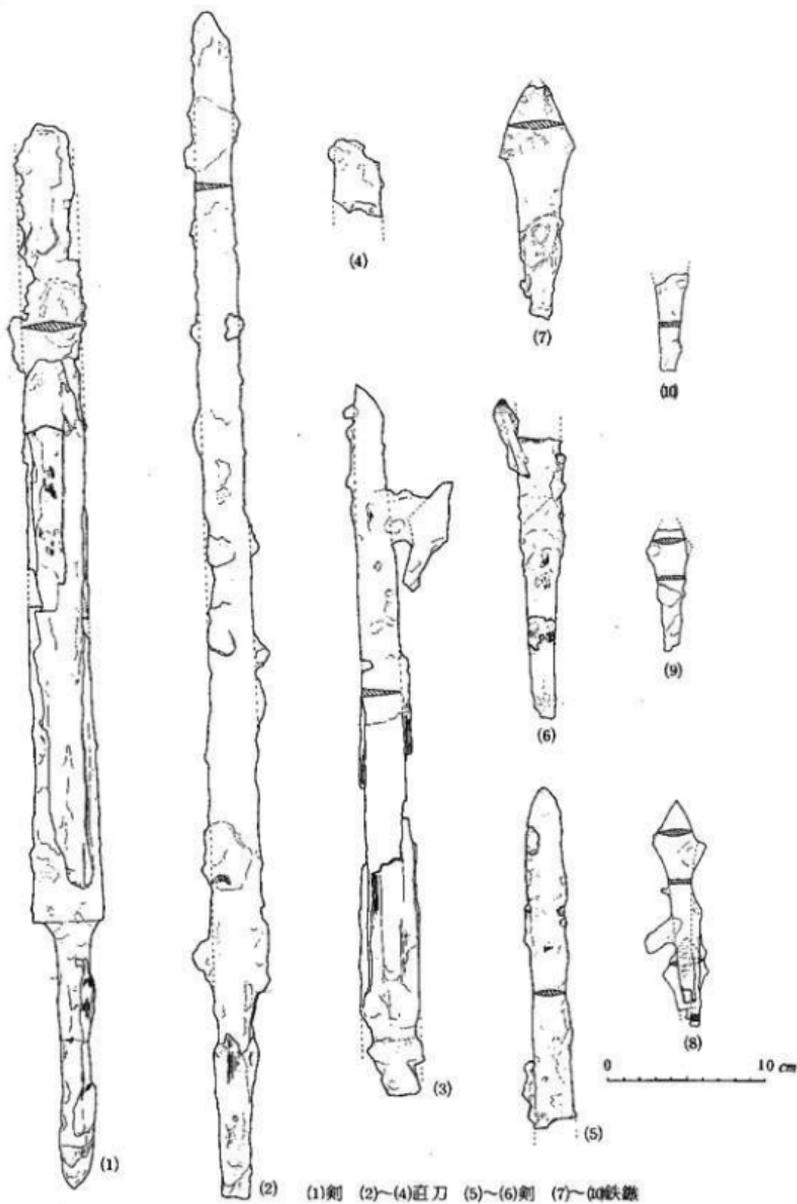
あり鹿角装が施こされていることなどから被葬者の身分を推想することもできる。玄室その他の形式から見て古墳時代の後期のものであることは明らかであるが、この前後に発見された同町大萩の地下式古墳群とともに考察すべきであろうと思う。



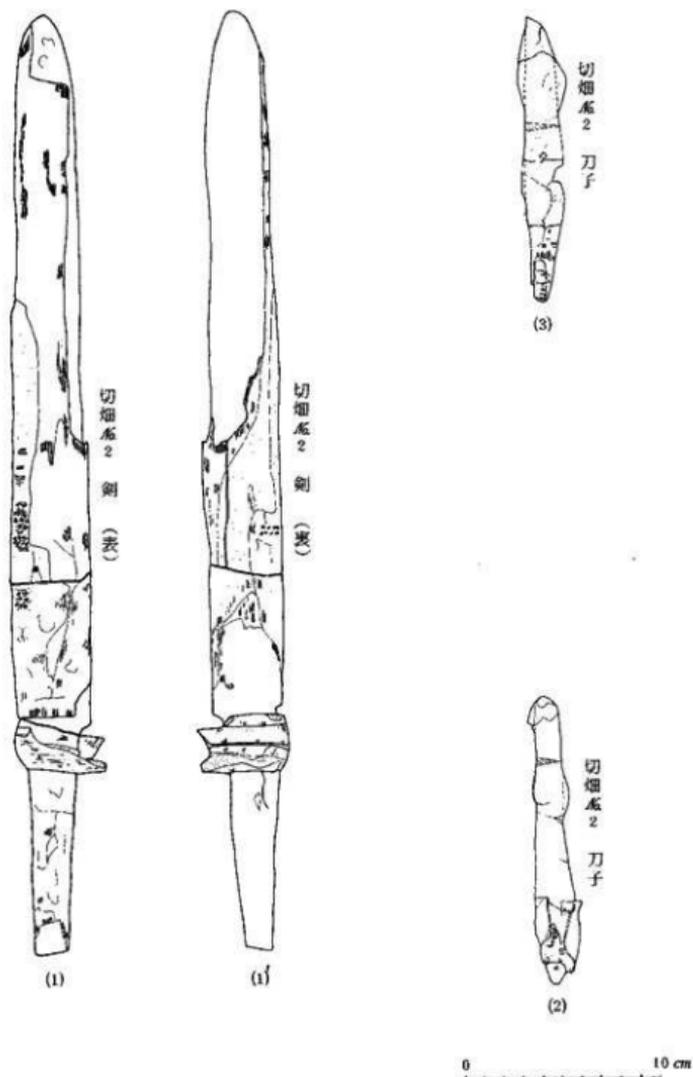
第1図 第1号墳実測図



第2圖 第2号墳尖頭圖



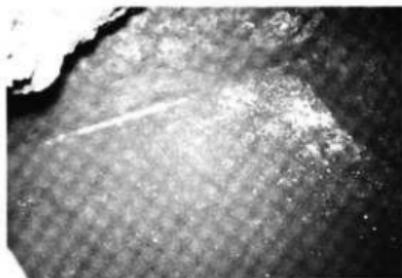
第3圖 第1号墳副葬品実測図
 (1)刺 (2)~(4)直刀 (5)~(6)刺 (7)~(9)鉄鏃



(1)(1) 劍 表-裏 (2)-(3) 刀子

第4圖 第2号墳副葬品実測圖

第1号墳 玄室内



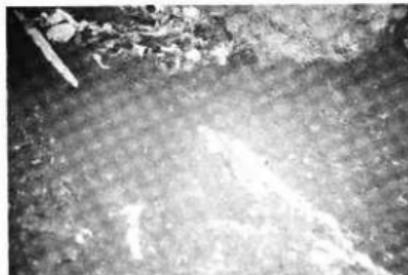
第2号墳 羨門の閉塞

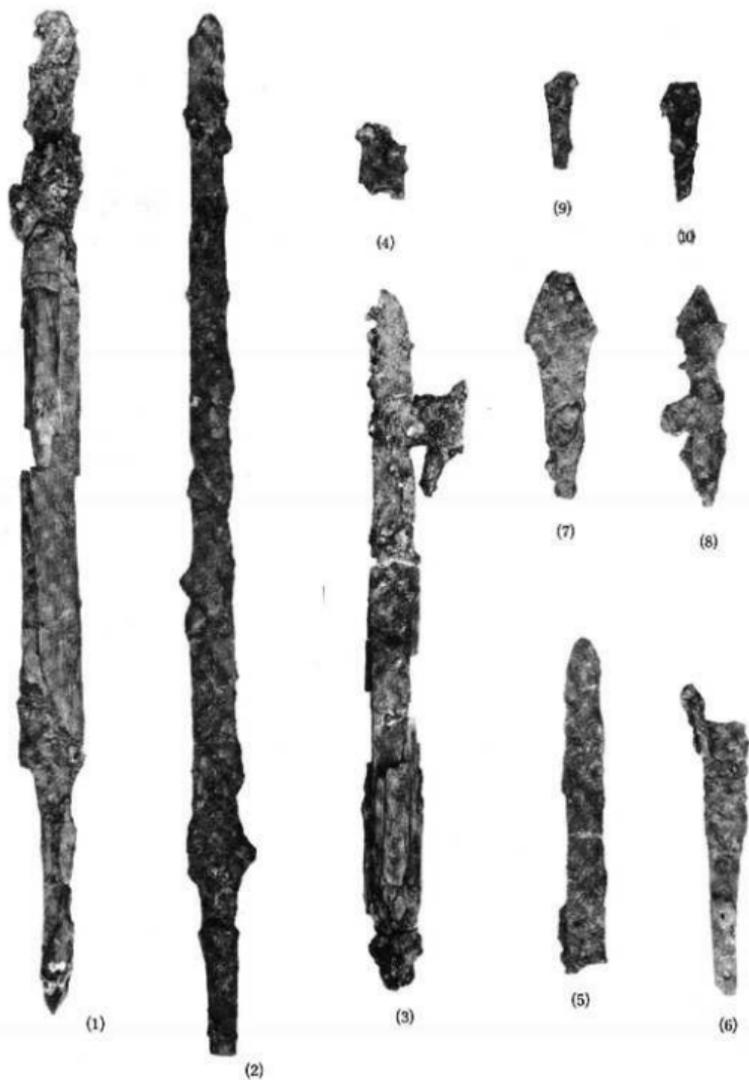


第2号墳の玄室内（東壁北隅）



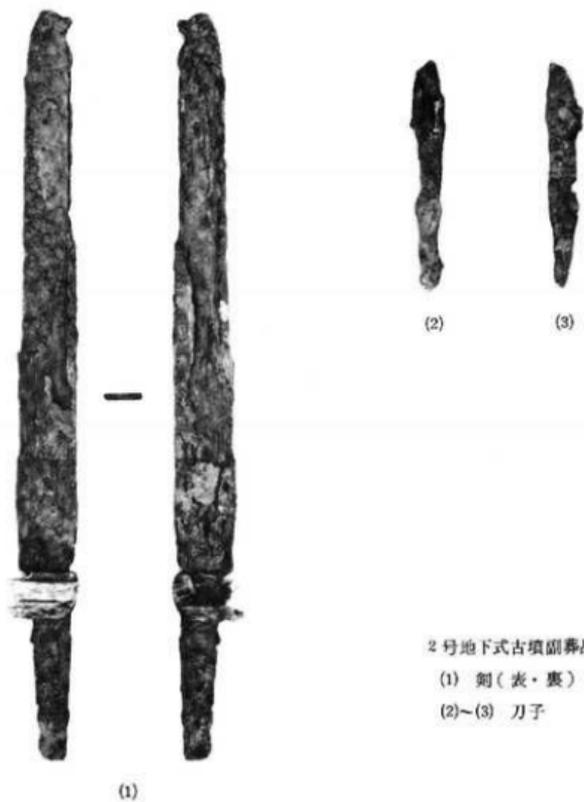
第2号墳の玄室内（東壁南隅）





1号地下式古墳副葬品

- | | | | |
|--------|--------------|---------|-------------|
| (1) 剣 | (3) 直刀（鉄鍔付着） | (5) 剣の先 | (7)~(10) 鉄鍔 |
| (2) 直刀 | (4) 直刀の先 | (6) 剣の柄 | |



2号地下式古墳副葬品

(1) 刺(表・裏)

(2)~(3) 刀子



Ⅳ 新田場地下式古墳発掘調査

小林市大字真方5498
(真方三南新田場)

県文化課主事 岩永哲夫

本 文 目 次

I 所在地	33
II 発見の動機と調査経過	33
III 調査の結果	34
IV まとめ	35

表 目 次

表 鉄鍬一覧表	34
---------	----

挿 図 目 次

第1図 遺跡所在地	38
第2図 新田場地下式古墳実測図	36
第3図 " 副葬品実測図	37

図 版 目 次

図版1 地下式古墳の状況	39
図版2 副葬品	40

I 所在地（第1図）

小林市大字真方5498番地（真方三南新出場）



第1図 遺跡所在地（○印）

本地下式古墳は、小林市より2.5Km北東、野尻町大萩遺跡より北西に4.8Kmの地点にあり、東方に岩瀬川をひかえた台地上にある。

九州縦貫自動車道建設の際に調査したえびの市久見泊、馬頭等と同様、台地上の縁辺に所在している。

土地所有者の前田栄喜氏の言によると、同屋敷内外に過去6基発見したが、家屋等の建築中であったので、そのまま埋めたということである。

II 発見の動機と調査経過

昭和50年5月25日、土地所有者前田栄喜氏が簡易水道工事作業中、地下式古墳の玄室の天井が落ち込み、発見された。現場に居合わせた小林市教育委員会の斉藤肇氏を通じて市教委・県教委文化課へ翌26日報告があった。

調査は26日筆者が行ない、市教委社会教育課長横山英正氏をはじめ、社会教育係長松田利夫氏、同課職

員の方々の協力を得た。

Ⅲ 調査の結果(第2図)

この地下式古墳は、天井の一部が破壊されていたが、その他の部分はほとんど当時のままの状態が残っていた。玄室内は調査できたが、窆穴式前室及び羨道は、家屋の真下に当たるため調査できなかった。

主体部は漆黒土中に設けられており、床はボラ層中8cmにまで掘り込まれ、天井の一部はオレンジ層に達している。主軸は南北に近く、わずかに西寄りであった。

羨道は、玄室寄りの所で高さ5.9cm、幅6.6cmの大ききで、川原石を詰め込んだ形の閉塞をしている。詰め込んだ川原石が玄室の入口に達していることから羨道の長さはあまり長くないことが考えられる。また、玄室の中心より東に寄ってうがたれている。

玄室は、寄棟造りで棚状施設が設けてあった。羨道側で東西250cm、奥壁側で266cmと奥に行くほど広くなっている。

長さは西側で198cm、東側で242cmと東の方がかなり広くなっている。棚状施設は奥壁で2.6cm、西側2.4cm、東側2.0cm、羨道に接する西側部分5cm、東側部分0cmである。

中には人骨が2体埋葬されていたが、いずれも頭を東にしていた。手前の人骨の顔面には朱が塗布されていた。また、人骨周辺にも朱が散乱していた。

副葬品は、剣1振、刀子1本、鉄鏃3本であったが、床面から打製石鏃を1本発見した。この石鏃は構築の際に粉れ込んだものであろう。

剣【第3図(1)】

總長71.4cm、身長54.7cm、身の中央幅3.4cm、柄長16.7cmで目釘穴1個がはっきりと分る。鞘の木質が柄に近い部分と剣先に残存している。

刀子【第3図(2)】

總長1.5cm、身長1.0cm、棟幅0.4cm、柄長5cm、身の中央幅1.6cm、柄部に木質が残存している。

鉄鏃(1)~(3)【第3図(3)~(5)】

別表参照

表 鉄 鏃 一 覧 表

番号	規 長 (cm)	最 広 部 (cm)	形 式	備 考
1	1 7 2	4.0	変形圭頭斧箭式	第3図(3) 欠損あり
2	2 0 0	3.6	"	" (4) "
3	1 8 2	2.8	"	" (5) "

N ま と め

調査の結果をまとめると次の如くなる。

(1) 構 造

- ① 全体形
逆Pに近い両袖形
- ② 竪穴式前室
不明
- ③ 閉塞
羨門川原石閉塞
- ④ 羨道
詰め込んだ石が玄門にまで達する位の長さ(計測不可能)
- ⑤ 玄室(台形)
妻入り型寄棟造りで棚状施設を有する。

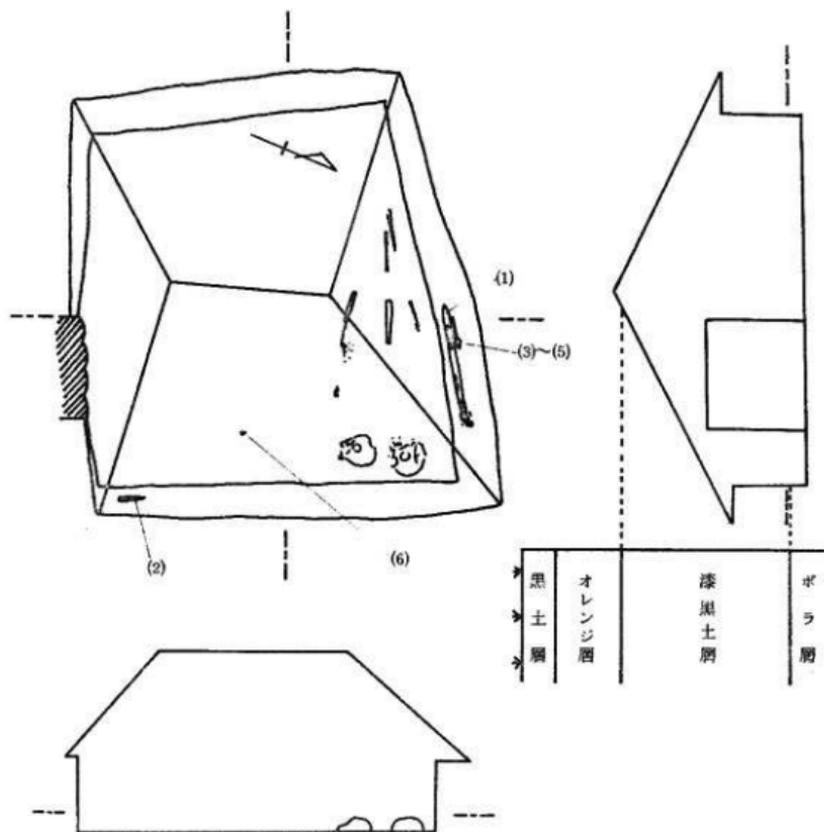
(2) 人 骨

2体葬られており、身体には何ら着けていない。

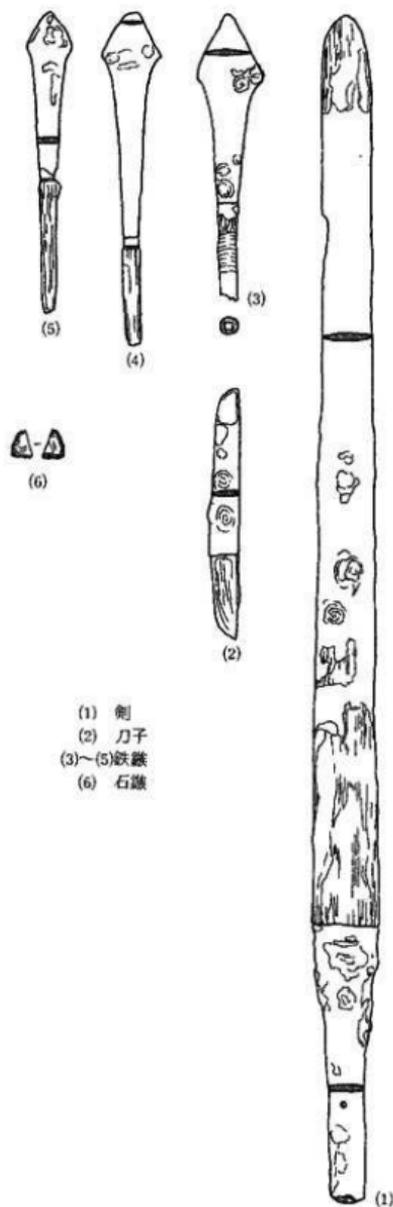
(3) 副 葬 品

- ① すべてが棚状施設に置いてある。
- ② 刺・鉄鏃 —— 奥壁棚
- ③ 刀子 —— 玄門寄り東壁棚

この新田嶺地区は、地下式古墳の群集地帯として、今後も発見される可能性が非常に大きいので、この調査を機会に市教委とも連絡をとり、注目していきたい。



第2図 新田場地下式古墳実測図



第3圖 新卍場地下式古墳副葬品実測圖





外部から見た遺跡



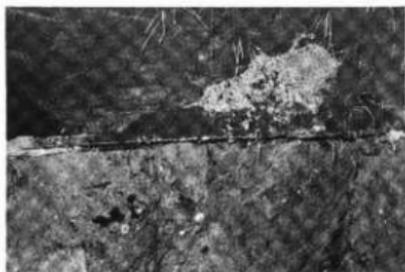
人骨の状況



刀子の副葬状況



支室から見た閉塞石



剣の副葬状況



副葬品（左から鉄鏃，刀子，剣）

V 雀ヶ野地下式古墳発掘調査

北諸県郡高城町大字四家408

県文化課主事 岩永哲夫

本文目次

I 所在地	43
II 発見の動機と調査経過	43
III 調査の結果	44
IV まとめ	45

挿図目次

第1図 遺跡所在地	43
第2図 雀ヶ野地下式古墳第1号実測図	46
第3図 " 副葬品実測図	47

図版目次

図版1 (1) 遺跡近景	49
(2) 発掘風景	49
図版2 玄室内状況	50
図版3 副葬品出土状況	51
図版4 副葬品(1)	52
図版5 " (2)	53

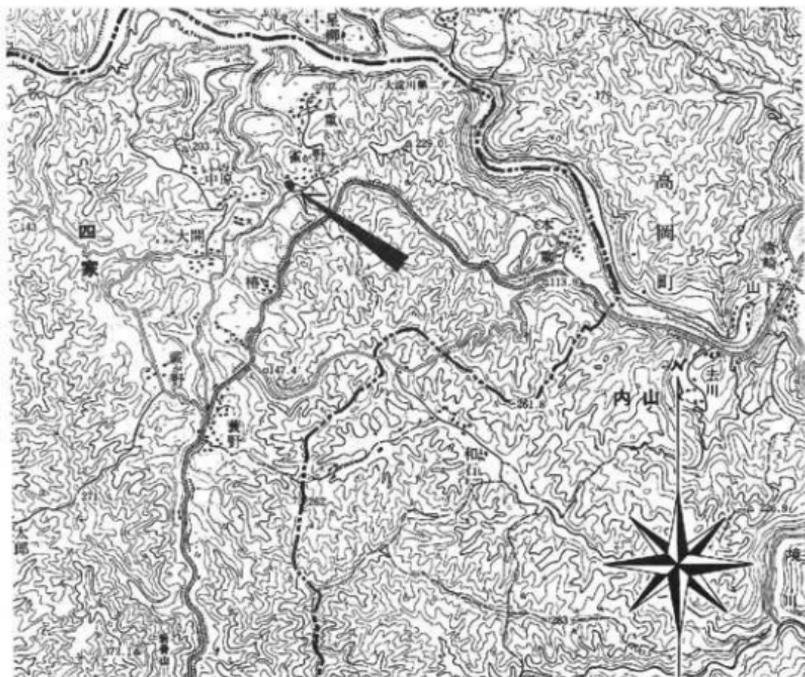
表目次

表 鉄器一覧表	45
---------	----

I 所在地（第1図）

北諸県郡高城町大字四家 408

（土地所有者同町大字四家 389 岩崎宗武氏）



第1図 遺跡所在地

II 発見の動機と調査経過

遺跡は、昭和52年3月9日、都城市の團田グリーンセンターが植樹のためブルドーザーにより桑畑を整地していたところ、地下式古墳の玄室天井部を破壊し、発見されたものである。

調査は、昭和52年3月14日県文化課主事岩永哲夫が担当し、高城町教育委員会の協力をいただいた。また、田ノ上哲、足立宏美両君の参加もあった。

現地は、大淀川支流の東側台地で雀ヶ野地区の西端に位置し、以前にも地下式古墳が何基か発見されたが、

そのまま埋土をしたという地元の人々の話であった。内、1基は、道路開きくの際発見されて、現在道路の法面に一部残っており、付近の人の手で人骨は箱に収められている。

現地一帯は、過去に調査されたことはないが、今後も事ある毎に発見される可能性が強く、雀ヶ野地下式古墳群として注意を要する地域である。

Ⅲ 調査の結果

雀ヶ野では、初めての調査であるので、雀ヶ野地下式古墳第1号と呼称する。

主軸線は、北東(玄室)～南西(竪穴式前室)に方位している。(第2図)

地層を観察すると、上層から

- ① 攪乱層(腐蝕、赤ホヤ、漆黒) 4.5 cm
- ② 漆黒土層 7.2 cm
- ③ 淡褐色粘土層(ボラ混入) 2.6 cm
- ④ 淡褐色粘土層

となっており、主体部は②～④にかけて構築している。なお、表土から玄室床面までの深さは160 cmである。主軸線全体の長さは、約465 cmである。

竪穴式前室の大きさは惣込み上部の中心付近で長さ225 cm、幅153 cmを計り、羨門寄りを底辺(165 cm)とする台形状である。底面では長さ180 cm、幅116 cmである。この竪穴式前室で注目されるのは、羨門閉塞方法で、竪穴式前室の半分以上、羨道の入口から計測して140 cmの付近まで淡褐色の粘土をもって閉塞し、自然層と間違えるほど堅くしめていることである。雀ヶ野における地下式古墳の特徴の一つである。

羨道は、長さ4.3 cm、羨門及び玄門の幅6.5 cm、中央が若干狭く6.0 cmであり、高さは破壊のため不明である。

玄室は、天井が落ち込み破壊されていたが、奥行240 cm、幅は入口付近が最も広く138 cm、奥壁に近いほど狭く105 cmまでなり、奥壁付近での天井の高さは100 cmである。平面形は玄門付近を底辺とする台形状を呈している。形式は妻入り型切妻造りである。

また、左右壁とも最広部5 cmほどの棚状施設を有している。

内部を観察すると、人骨は頭部を入口に向けて一体であったと考えられ、遺存状態悪く骨片がわずかに残っていた。

副葬品は鎌を奥に向けて剣一振、その剣の下に鎌を逆方向に刀子1本、剣の柄から1.5 cm右壁寄りに鉄斧頭1本、また入口寄りに鉄鎌を2.4本、計2.7点であった。

剣【第3図(1)】

三ヶ所折れていたが、一ヶ所は接着ができ、もう一ヶ所は柄の部分で、途中が欠失しており接ぐことができなかった。

身長56.8 cm、身の中央幅4.0 cm、柄長不明、目釘穴1個が見えている。所々に鞘の木質が残っている。

刀子【第3図(2)】

総長21.2cm, 身長15.0cm, 柄長6.2cm, 身は細身で中央幅1.2cm, 柄には鹿角装の一部が残存し, 身の所々に布痕が見られる。横幅0.3cm。

斧頭【第3図(2)】

上部両端部を折り曲げた袋部を有する鉄斧頭で, 大きさは長さ7.4cm, 刃部幅4.3cmである。

また, 片面には斜行した木質痕が残り, もう一面には半織りの布痕がはっきりと残っている。

鉄鏃(1)~(2)【第3図(4)~(5)】

表参照

鉄鏃はこのほかに, 12本位あるが, いずれも形状詳細は不明。

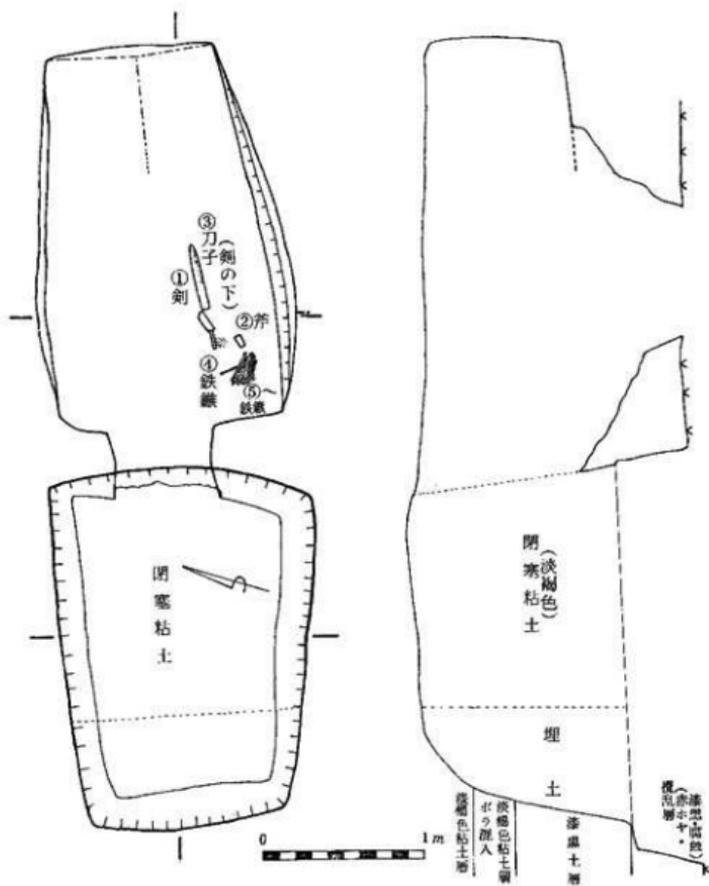
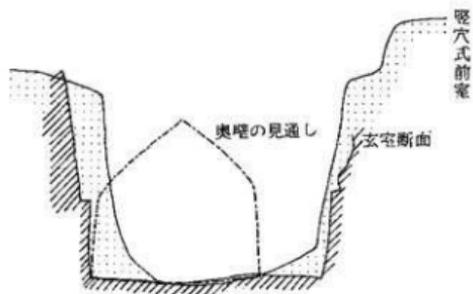
表 鉄 鏃 一 覧 表

番号	現 長 (cm)	最 広 部 (cm)	形 式	備 考
1	1 6.5	1.2	篋被腸扶柳葉式	第3図(4)
2	1 5.0	0.7	篋被柳葉式	# (5)
3	1 5.0	1.4	篋被三角形式	# (6)
4	1 0.8	1.0	類柳葉三角形式	# (7)
5	1 1.3	0.6	?	# (8)
6	1 4.6	1.5	篋被三角形式	# (9)
7	1 2.6	1.2	篋被柳葉式	# 00
8	7.2	1.0	篋被片刃箭式	# 01
9	8.0	1.1	篋被三角形式	# 02
10	7.4	1.1	腸扶柳葉式	# 03
11	8.2	0.8	篋被片刃箭式	# 04

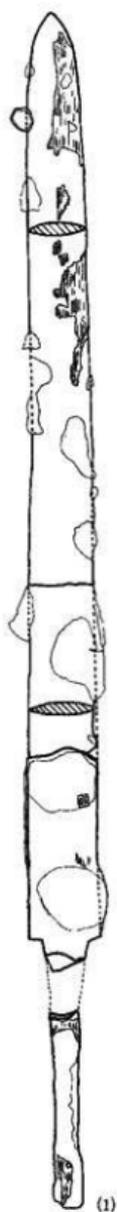
Ⅳ ま と め

この調査は, 雀ヶ野地区における最初の調査であり, しかも地下式古墳の中では古形式とされる妻入り埴切冢造りの構造をもち, また, 堅穴式前室の埋土の堅さは予想外のことであった。

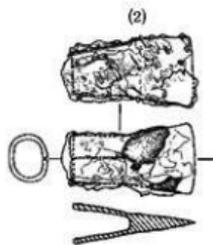
副葬品の種類は決して多くはないが, 鉄鏃の種類が豊富で, 検討の必要があるものもある。今後, 地下式古墳の副葬品としての鉄鏃の形式分類編年の作業も重要な課題にならうかと思う。



第2圖 雀ヶ野地下式古墳第1号実測圖



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)



(12)



(13)



(14)



(15)



第3圖 釜ヶ野地下式古墳第1号副葬品実測図

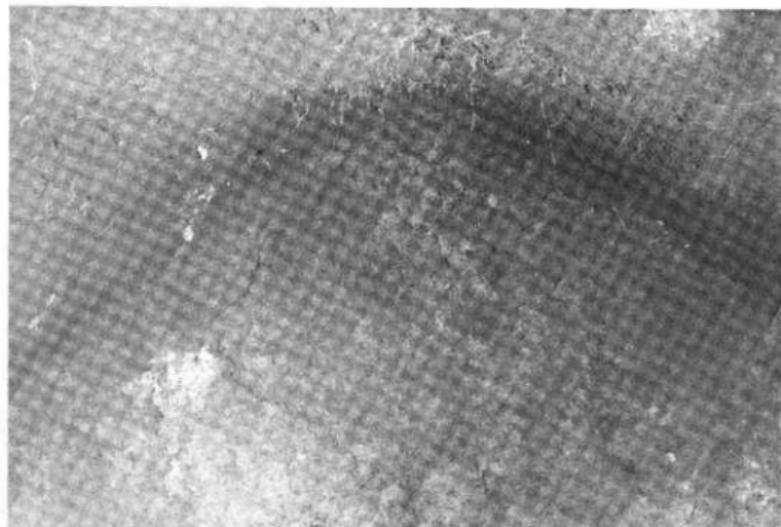




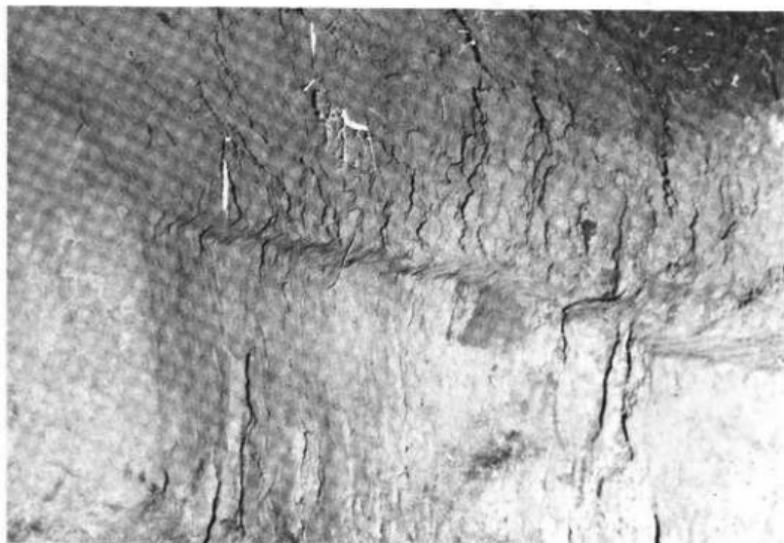
(1) 遺跡近景



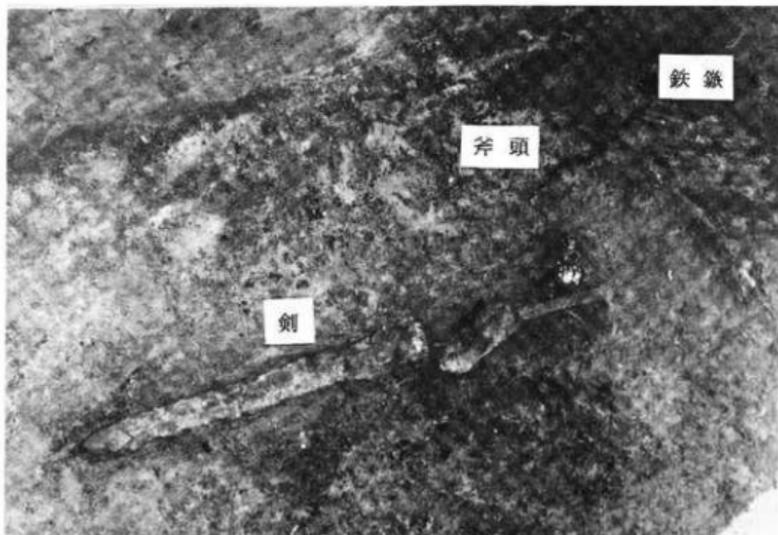
(2) 発掘風景



(1) 女室奥壁天井部



(2) 女室右壁棚状施設



(1) 劍、斧頭及び鉄滓出土状況



(2) 鉄滓出土状況



(2)



圖 葬 品 (1)



(7)



(8)



00



01



(9)



02

副 葬 品 (2)



VI 牧原箱式石棺発掘調査

北諸県郡高城町大字大井手
3481の1

県文化財保護審議会委員 石川恒太郎
県文化課主事 岩永哲夫

本 文 目 次

I 所在と発見の動機	57
II 調査の結果	57
III 遺 物	58
IV 古墳の特徴と年代	58
V 結 語	59

挿 図 目 次

第1図 牧ノ原古墳群分布図	60
第2図 牧ノ原箱式石棺実測図	61

図 版 目 次

図 版 箱式石棺遺構状況	63
(1)~(3) 箱式石棺	
(4) 副 葬 品	

I 所在と発見の動機

この箱式石棺が発見されたのは北諸県郡高城町大字大井手字牧ノ原で、この大字大井手という所は、高城の市街地が大淀川の支流東岳川の流れて北南から東にし字形に形成されているところの背後をなしている丘地で、市街地と河流との間には、かなり広闊な水田が開かれているが、これらの水田は東岳川の水を河流の湾曲しているのを利用して整琴の線のように、幾つもの溝（井手）を掘って作ったもので、大井手の名はこれに因るものであろう。だから大井手の丘地は大淀川の河成段丘で、現在丘地は市街地より約20mぐらい高くなっている。この大字大井手の丘地には県指定の古墳が13基あり、そのうち10基は字牧ノ原にあり、3基は字立喰にあるが一般にこの13基を牧ノ原古墳群と呼んでいる。

これらの古墳群のうち牧ノ原にある10基は前方後円墳3基と円墳7基で、字立喰にある3基は何れも円墳であるが、牧ノ原にある10基の位置は第1図に示す通りである。

この第1図のF左（北東）部に見える第8号（右）と第9号（左）の2基の円墳の中箇の第8号寄りの所に図面に見られるように昭和51年12月に土地の養豚業者が豚舎を建設し、その西側に汚水を溜めるための深い穴を掘ったところが、石棺が発見され頭蓋骨や刀、剣などが出土したので、同町教育委員会に届け出たもので、同町教委よりの連絡で県教育庁文化課では12月8日にこれを調査することになり、同課の岩永哲夫主事、田ノ上哲氏と筆者が出張調査した。

II 調査の結果

われわれが現地に行った時は既に石棺の1部が破壊されて頭蓋骨1と刀1、剣1、鉄鎌1が掘り出されていた。その状態でこの地層を見ると、ここは地表から2.2cmの深さに耕土があり、その下30cmの深さにボラを混じた黒土層があり、その下20cmの深さに黒褐色の土層があり、さらにその下に30cmの深さまで黒色の土層があり、その下に17cm内外のボラを混じた黒色の土層があり、その下は御池軽石層と呼ばれる土層が深く入っていたが、石棺はこの御池軽石層の中に深さ55cmの点を底となし、側壁の石は底からさらに15cmぐらい深く入っていた。だから地表から棺底までは165cmを測る程の深さであった。（第1図参照）

この石棺は扁平な自然石を箱形に並べて箱の身を造り、底石を置いてその上に死体を葬り、副葬品を納めて、さらにその上に扁平な石を並べ、石と石の継目にさらに石を冠せて粘土で目張りしたいわゆる箱式石棺で、その方位はほとんど正しく南北に方位しており、その南部を破壊されていたわけである。しかしこの棺を埋葬するためには地表から棺を埋葬するための深い穴を掘って、棺を埋葬した後にもた埋め戻したもので、このことはその時の埋め土が鮮明な地層の中に入っているのが明らかであった。それでこの埋め土を見ると、黒色の埋め土は現在の地表から110cmの下にある御池軽石層を深さ55cm、東西の幅140cm、南北の長さは南端がないので知ることができないが、棺の北壁石と埋土の北端との間は15cmの間隔があった。この

状況は第2図および図版1に見られる通りである。次にこの埋め上を除き去ると、第2図下段右側2つ及び上の図と図版2に見られるように、扁平な蓋石が冠せられていた。さらにこの蓋石を取り外すと第2図上および下段左右と図版3に見られるように、東西の側壁は扁平な長い石を2重または3重に並べ、南端は短かい2枚の石から成り、1枚は東と西の壁石が倒れぬように両側の石の間に挟ませ、1枚のやや厚い石でその外から補強してあり、棺底に底石が敷かれていたが棺の深さは88cmであった。そして棺の大きさは東西の幅中央で70cm、残存する南北の長さ119cmであった。

棺底は綿密に調査したが、何物も遺存していなかった。だから遺物はすべて破壊されていた南部に存在したものと想われた。そうするとこの石棺に葬られていた人は、頭を南にし、足を北にして葬られていたものと思われる。また発見者の語るところによると、南壁の石の内側の棺のほぼ中央に頭蓋骨があり、その西側に西壁の石に接してこれと平行に柄を南に鋒を北にして刀があり、その東にこれと平行して柄を南にして鉈があり、さらにその東に鉄鎌が、これも刃を南にし刃を北にしてあったということである。

Ⅲ 遺物

遺物は前に述べたように刀1振と剣1振と鉄鎌1本、および頭蓋骨の削れたものだけであった。

A 刀1振

ほぼ完形であるが、柄部は大部分欠失している。現在の総長64cm、そのうち柄長は12cm、身の長さ62.8cmで鈔元に鞘の木質を残している。身幅3cm、棟幅0.7cmである。

B 剣1振

身の1部を欠失して総長31.5cm、うち柄長6.4cm、中茎幅1.8cm、中茎の厚さ0.2cmであるが柄端から0.8cmと3.5cmの所の2ヶ所に目釘穴がある。身の残存長は25.1cm、身幅は3.2cmである。

C 鉄鎌1本

総長9cm、鉾形で刃幅3cm、厚さ1mmの平根である。

Ⅳ 古墳の特徴と年代

この石棺は前に述べたように扁平な自然石を並べて石棺を造っている代表的な箱式石棺であるが、この式の箱式石棺は県下各地に存在しており、この大井手においても昭和42年に第10号墳の南側10m余と

30m余の2カ所で箱式石棺2基が発見され(註1)、翌43年にも第18号円墳の西部で1基発見されたことがある(註2)。しかし今回のは、その埋没の深いことが以前のものであり、発見された時は地下式古墳と間違えられたほどであった。しかし前に述べたように、この石棺も初めから現在のように深く埋没されていたものではなく、初めは現在の地表から110cm下の御池軽石層の表面から掘り込まれているのである。それが何故にこのように深くなったのかということは、石棺の上に積っている地層がこれを物語っている。すなわち第2層のボラの混った黒土層、その下の黒褐色土層、第5層のボラ混りの黒土層など、磐島山から噴出されたボラや火山灰の堆積が多いことを物語っている。

この事は盛土を有する古墳ではボラなどは転げ落ち、火山灰は風当りが強いから吹き飛ばされて、このような地下にある古墳ほど積らないものと考えられる。また同じ大井でも、土地の地形や風向により土の積り易い所と積り難い所はあるであろうと思われる。

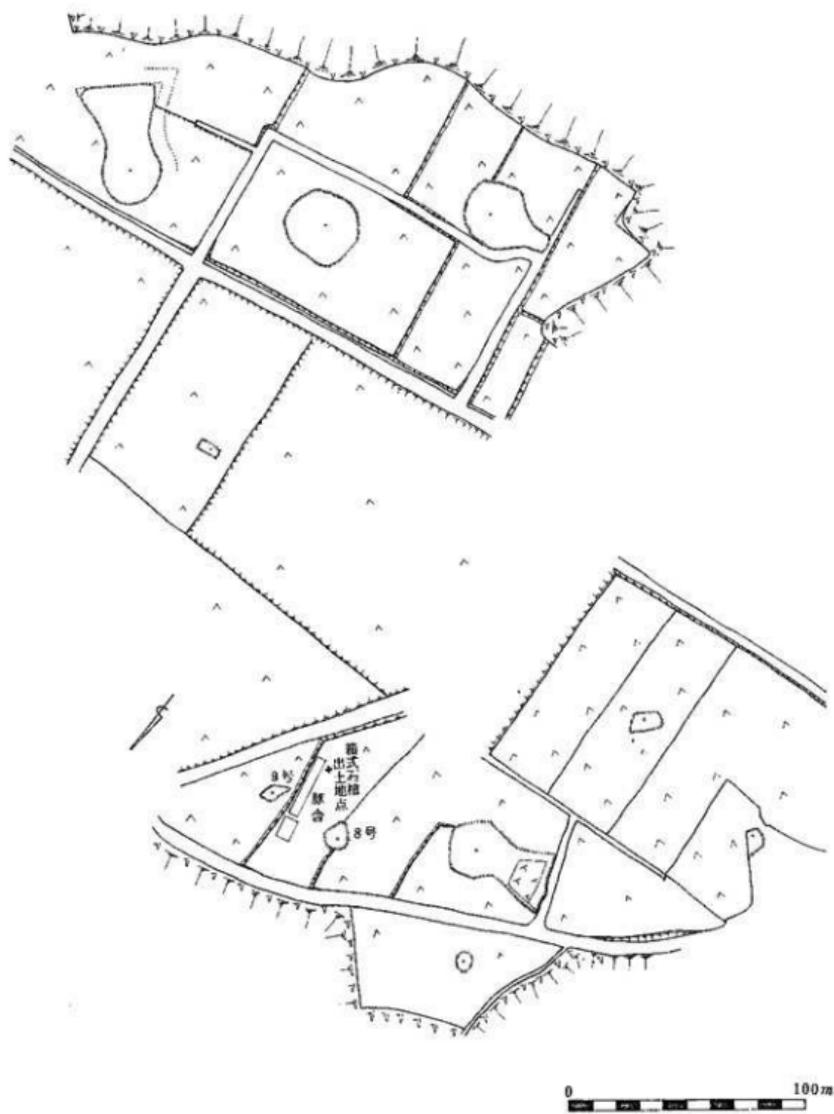
箱式石棺は弥生時代から古墳時代を通じて行われた墓制であるが、その形にも色々の種類がある。まず棺底に石を敷いているものと敷いていないものがあり、本県の例では弥生時代のものには底石を敷かないものが多いようである。また棺の1端または両端に側壁を長くすることによって副室を設けているものと、副室をもたないものがあるが、本県の例では副室をもつものは少ない。そして弥生時代には副室を持つものはないようである。

また古墳の遺物から言えば平根の鉄鍬は尖根より古いと言われていたから、この石棺は石棺の形と遺物から見て古墳時代中期の遺跡と見るべきであろう。

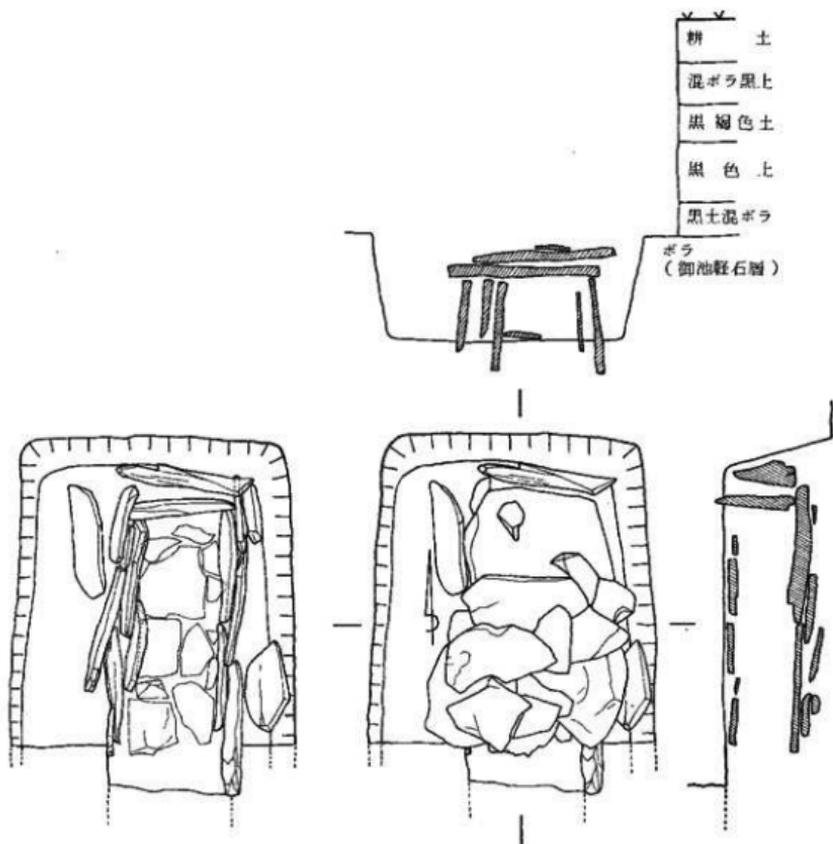
V 結 語

以上に述べたごとく、この箱式石棺は養蚕業者が邸舎を建設した際に発見されたもので着工前に町教育委員会の了解を得て着手したと聞いたが、しかしこの牧ノ原古墳群は前方後円墳3基を含み、北諸県郡下では最も重要な古墳群であるばかりではなく、その後も古墳と古墳との中間地から土坑や地下式古墳、箱式石棺などが相次いで発見されている。このような丘陵地には、尚お多くの埋蔵文化財が存在するであろうということは十分に予想されるわけであるから、このような古墳群の真中にこのような工作物を建設する場合には町教委も十分に慎重な態度を以て臨み、地元の文化財保護委員会等に諮った上で県の文化課の意向を聴いて可否を決するようにすることが望ましいと思うのである。(本文・写真、石川、実測・図版作成、岩永哲夫・田ノ上哲)

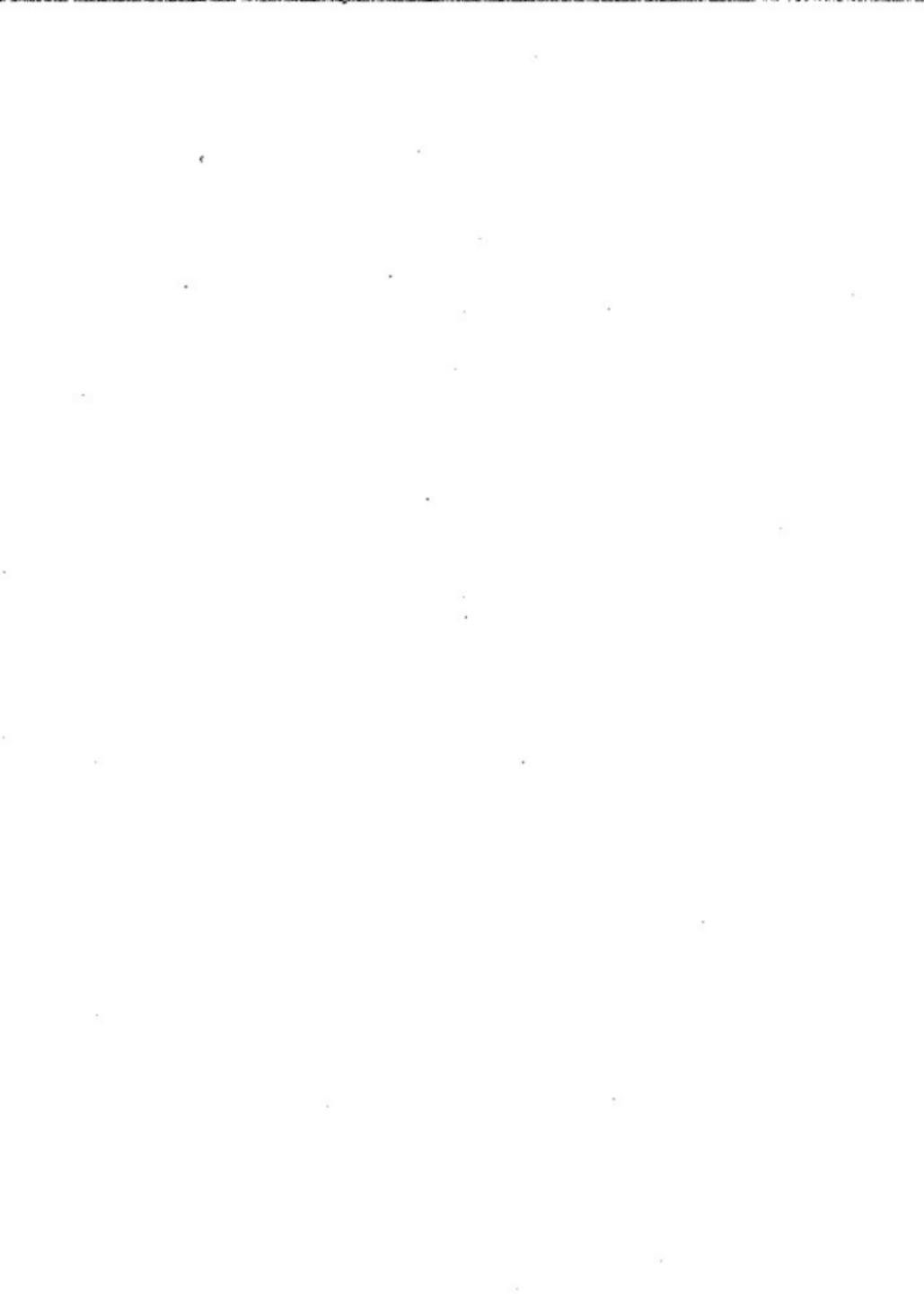
- 註 1. 栗原文蔵「高城町牧ノ原発見の石棺」
(宮崎県文化財調査報告書、第12輯)
註 2. 石川「高城町牧ノ原遺跡調査報告書」
(同上報告書、第14輯)



第1圖 牧ノ原古墳群分布圖



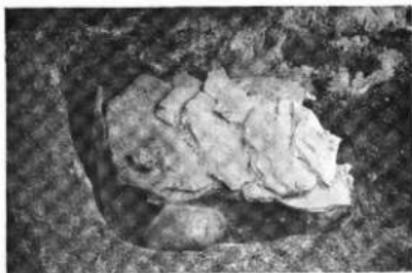
第2図 牧ノ原箱式石棺実測図





(1)

(2)



(3)



(4)





Ⅶ 平松地下式古墳発掘調査

(昭52-1号)

えびの市大字島内字平松1135

県文化課主事 岩永哲夫

本 文 目 次

I 所在地	67
II 発見の動機と調査経過	67
III 調査の結果	68
IV ま と め	69

挿 図 目 次

第1図 遺跡所在地	67
第2図 平松地下式古墳実測図	70
第3図 副葬品実測図	71

図 版 目 次

図版 1 (1) 発掘風景	73
(2) 玄室内部の状況	73
図版 2 (1) 鉄鍬の副葬状況	74
(2) 玄室壁面状況	74
図版 3 副葬品	75

表 鉄鍬一覧表	69
---------	----

I 所在地 (第1図)

えびの市大字島内字平松1135番地



第1図 遺跡所在地(O印)

本地下式古墳の所在するえびの市大字島内には、真幸古墳として県指定(昭和8年12月6日)になっている地下式古墳が12件あるが、字は杉原、平松の2字である。

これらの地下式古墳がどの地点に所在するのか判然としませんが、隣接する地域であり、同一集団の群集墓として考えていいのではないかと思う。

II 発見の動機と調査経過

昭和52年1月10日、畑をトラクターにより耕作中に地下式古墳の竪穴式前室を破壊し、発見されたものである。ただちに市教育委員会から県教育委員会へ連絡があり、協議の結果、昭和52年1月14日に発掘調査を実施することになった。

調査は県文化課主事岩永哲夫が担当し、えびの市教育委員会の方々の協力をいただいた。

現地は、東に円墳をひかえた畑作地帯で全くの台地のため、寒風が強く、腰をとりながらの調査であった。

Ⅲ 調査の結果 (第2図)

本地下式古墳は、竪穴式前室上部が破壊されていたが、中には蓋石とみられる石が落ち込んでおり、竪穴式前室上部閉塞であったことがわかる。閉塞石は2~3個のようである。

地層を観察すると、上層から

- | | |
|-----------|------|
| ① 黒色土層 | 31cm |
| ② 赤ホヤ層 | 30cm |
| ③ 黒褐色粘質土層 | 12cm |
| ④ 淡褐色粘質土層 | 55cm |
| ⑤ 砂礫層 | |

となっており、主体部は、④~⑤にかけて構築されている。したがって、表土から玄室床面までは166cmある。

主軸線は正しく南北に方位し、玄室を北に竪穴式前室を南にしている。全体の長さは170cmであり、小型の池下式古墳である。竪穴式前室は上部で57×59cmのほぼ円形で、下部に至っても直径65cm程度であり、わずかな広がりをもせて垂直に掘り込んでいる。表土から底まで168cmである。

羨道、玄室とも下部は砂礫層に達しているため崩壊がはげしく、原形をとどめていないが、壁面上部及び玄室天井は第4層の淡褐色粘質土層のため、よく保存されており、床面形状はある程度推定できる。

羨道はどの位のものだったか判断しがたい。

玄室は、平入り型寄棟造りということが出来る。推定される玄室の大きさは、長さ約110cm、幅約140cm、高さ78cmである。

人骨は玄室中央に1体、頭部を東に向けて葬られていた。

副葬品は、東側奥壁にかたまっており、小型平根鉄鏃10本、奥壁に接して大型平根鉄鏃1本とともに鋒を東に向けて副葬し、それに平行して、剣の柄が1個残存していた。

次下、副葬品について述べる。

① 剣【第3図(1)】

これは柄のみで、現長153cm、目釘穴5個。玄室内部の観察では、初めから折れた柄だけを副葬したと思われる。

② 鉄鏃【第3図(2)~(3)、表1】

すべて菱形主頭斧箭式。

表 鉄 鎌 一 覧 表

番号	現 長 (cm)	最 広 部 (cm)	形 式	備 考
1	180	5.4	変形圭頭斧箭式	第3図 (2)
2	133	3.0	#	# (3)
3	135	3.0	#	# (4)
4	118	3.2	#	# (5)
5	116	3.0	#	# (6)
6	141	3.3	#	# (7)
7	160	2.7	#	# (8)
8	138	3.2	#	# (9)
9	118	3.3	#	# (10)
10	117	2.8	#	# (11)
11	123	3.4	#	# (12)

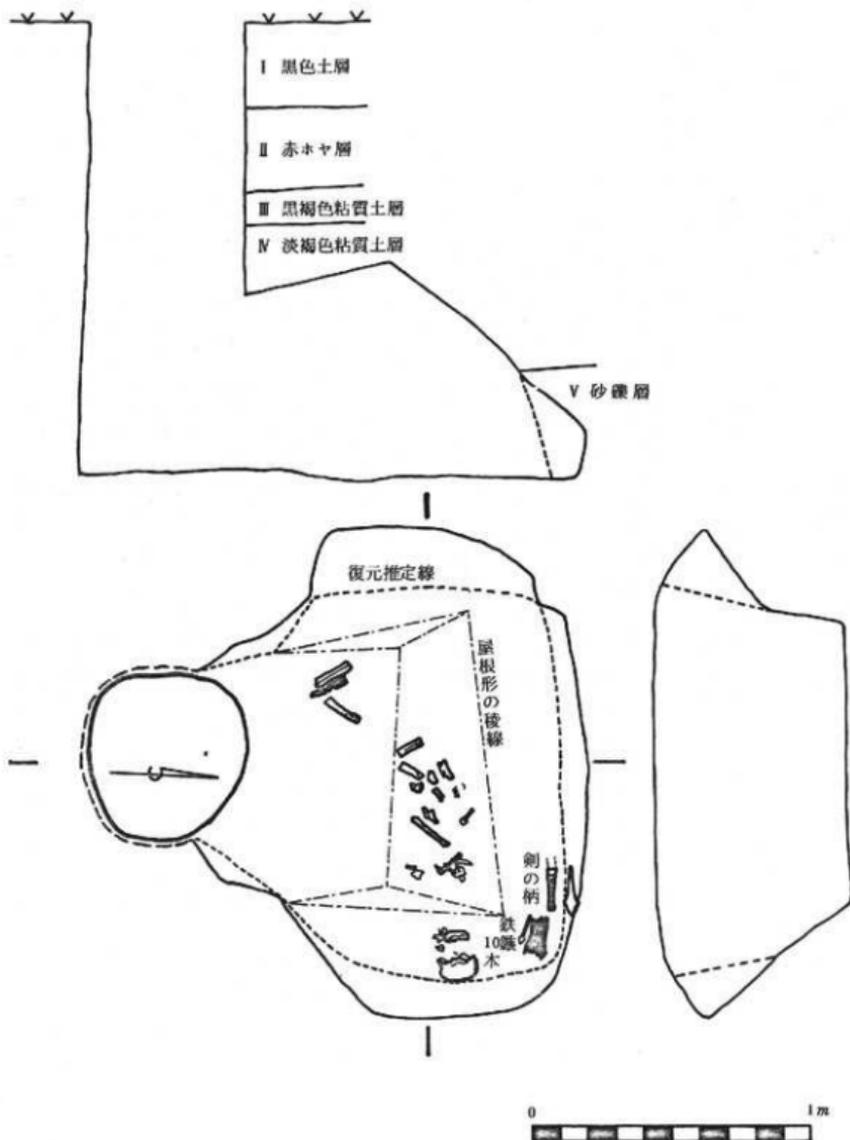
Ⅳ ま と め

本地下式古墳は、竪穴式前室上部閉塞、円形竪穴式前室、支室の平入り型寄棟造りを特徴としてあげることができる。竪穴式前室上部閉塞は、えびの市に多く見られる形式で、島内をはじめ、小木原、灰塚等で調査されている。

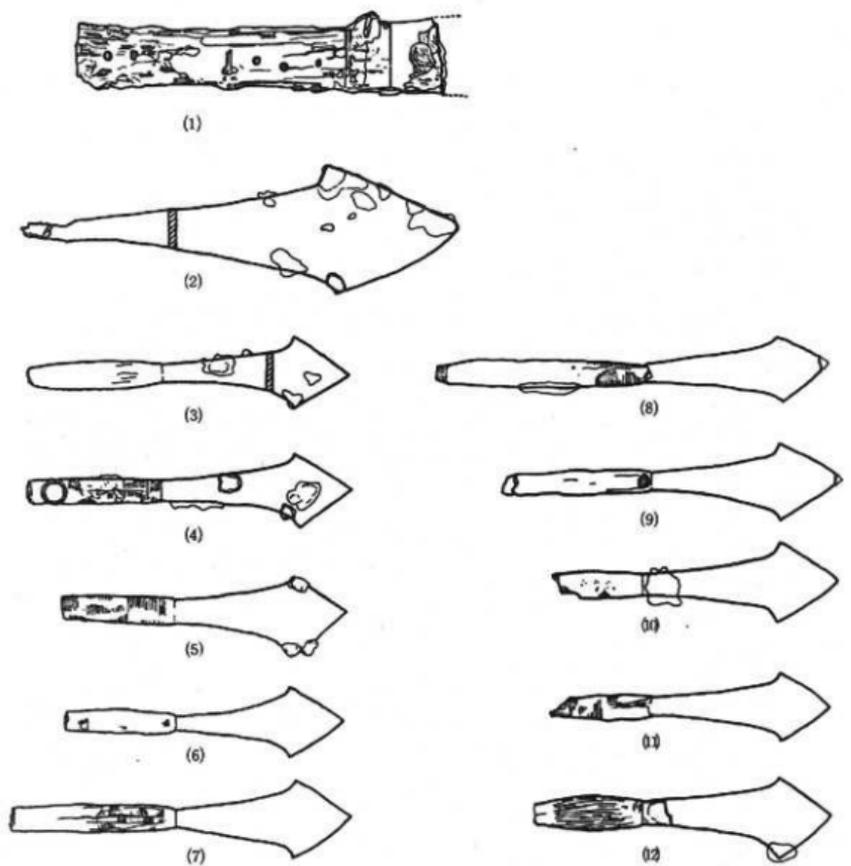
この竪穴式前室は、小さく造られた円形で、ほとんど広がりを見ないでそのまま垂直に掘っているため、原形のままでは調査ができず、竪穴式前室南側を掘り上げざるを得なかった。

また、昭和10年以来、島内で調査された7基の内、有蓋式の5基はともに主軸が南北に方位し、支室を北に、竪穴式前室を南に構築しているのは意味深い。

今後、更に発見例が増加する可能性は強く、大字島内所在の地下式古墳の全ぼうが次第に明らかにされることと思う。



第2圖 平松地下式古墳実測図



第3图 平松地下式古墳副葬品尖刺圖

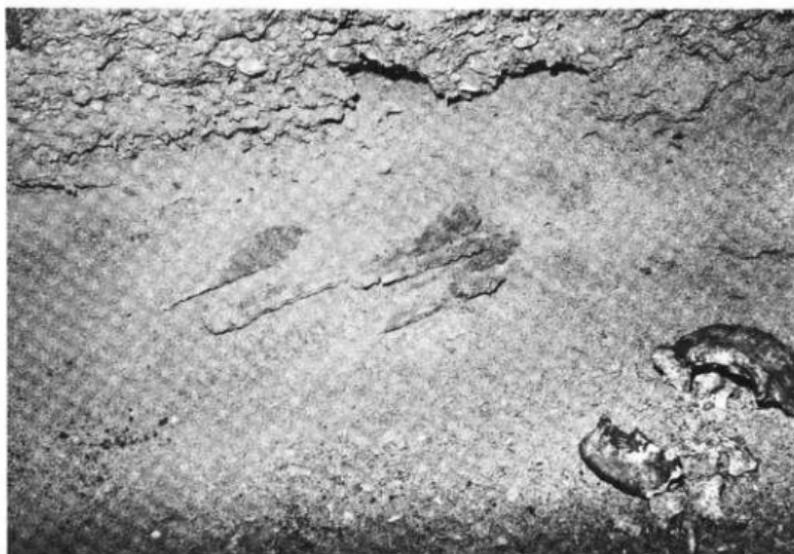




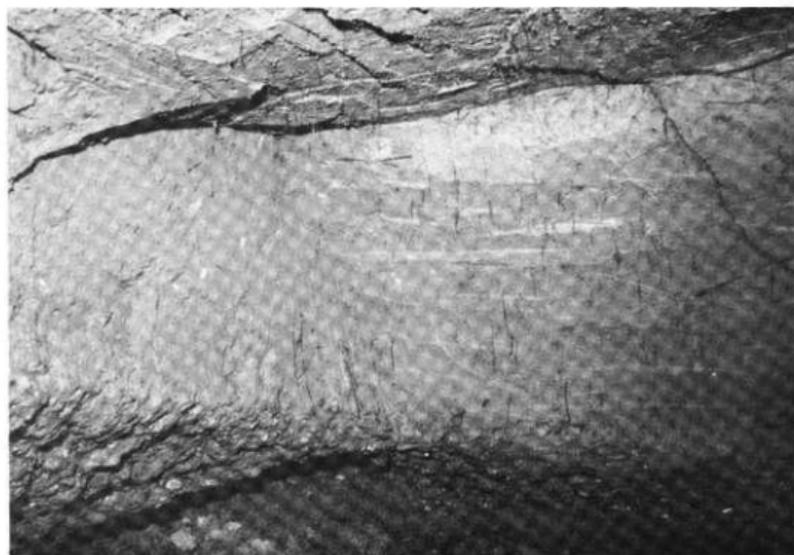
(1) 発掘風景



(2) 女室内部の状況



(1) 鉄鐏の腐蝕状況



(2) 玄室壁面状況



副葬品



Ⅷ 築池地下式古墳発掘調査

都城市下水流町字築池
2579番地

県文化課主事 岩永哲夫
県埋蔵文化財調査員 田ノ上 哲

本文目次

I 所在地	79
II 発見の動機と調査経過	79
III 調査の結果	80
IV まとめ	80

挿図目次

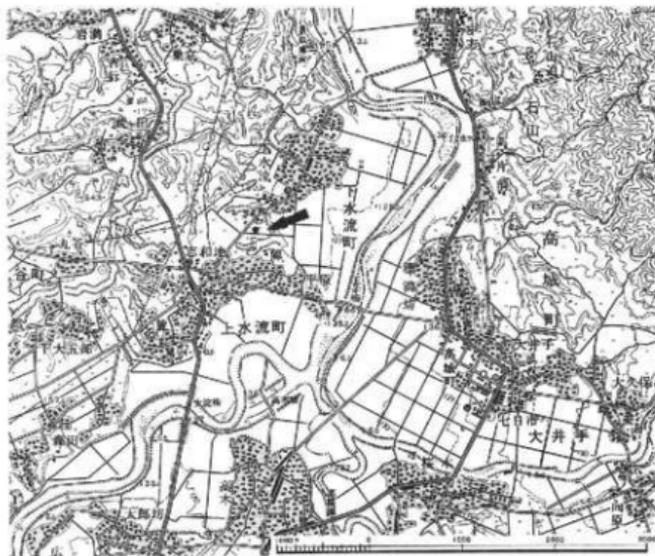
第1図 遺跡所在地	79
第2図 築池地下式古墳出土地点周辺図	82
第3図 築池地下式古墳実測図	83
第4図 副葬品実測図	85

図版目次

図版 築池地下式古墳副葬品	87
---------------	----

I 所在地 (第1図)

都城市下水流町茶池2579番地



第1図 遺跡所在地

II 発見の動機と調査経過

現地は、同市下水流町884-1平原岳水氏の所有にかかる畑地で、製作物が植え付けてあつたが、昭和52年4月26日一部が自然陥没しているのを土地の人が気づき、都城市立図書館に電話連絡してきた。同日、遺跡発見の旨の連絡が県教育委員会にあり、それに基づき、4月30日緊急発掘調査を実施することになった。

調査は、筆者と、県埋蔵文化財調査員田ノ上晋が担当し、都城市立図書館職員との協力を得た。

この地下式古墳が発見された地点は、県指定志和池古墳の点在する地帯で、早馬塚古墳は本遺跡から北西へ約200mの地点にある(第2図)。

昭和48年8月28日にもこの付近で地下式古墳が発見され、日高正晴氏が調査報告されている(註)。

Ⅲ 調査の結果 (第3回)

本地下式古墳の自然陥没したところは玄室天井であった。

まず、地層を観察すると、上層から

- | | |
|------------------|-------|
| ① 漆黒土層 (耕土) | 64cm |
| ② 漸移層 (ボラ混入漆黒土層) | 24cm |
| ③ ボラ層 | 120cm |
| ④ 白色ボラ層 | |

の順になっており、地表から玄室床面までの深さ約210cmである。

主体部は第3層のボラ層に構築されている。

ボラ層に主体部が設けられている多くがそうであるように、この地下式古墳も天井や壁面のボラの崩壊によって原形に復することが非常に困難であった。

全体の形状は計測した結果から考えて、隅丸にはなっているものの片袖の妻入り型寄棟造りの可能性が高く、竪穴式前室を北に、玄室を南に構築している。

竪穴式前室まで発掘することはできなかったが、羨道の長さは55cmを測り、高さは不明である。

玄室の規模は現状では、長軸235cm、短軸160cmであり、天井までの高さは不明である。

人骨は1体で頭を北向き(羨道側)に葬られ、玄室中央より右壁寄りに位置していた。

副葬品は3点だが、直刀が人骨の左脇に鋒を足方向に向け、また、刀子は直刀と直角方向に胸部付近に置き、鉄輪は右腕にはめたままと考えられるような状態で発見された。

その他、奥壁寄りに1カ所朱の散乱の痕跡がみられた。

① 直刀【第4図(1)】

現長97.6cm、身長約80cm、身幅3.5~3.7cm、棟幅0.7cmである。

柄部には糸巻きが残っており、身部には鞘の木質残存がみられる。

② 刀子【第4図(2)】

鹿角装の刀子で現長10.5cm、ただし、身は途中で折れている。

③ 鉄輪【第4図(3)】

直径0.4cmの鉄棒をもって直径6cmの輪を作り、更にその輪に1cm方形に形づくった輪を4個巻いているものである。

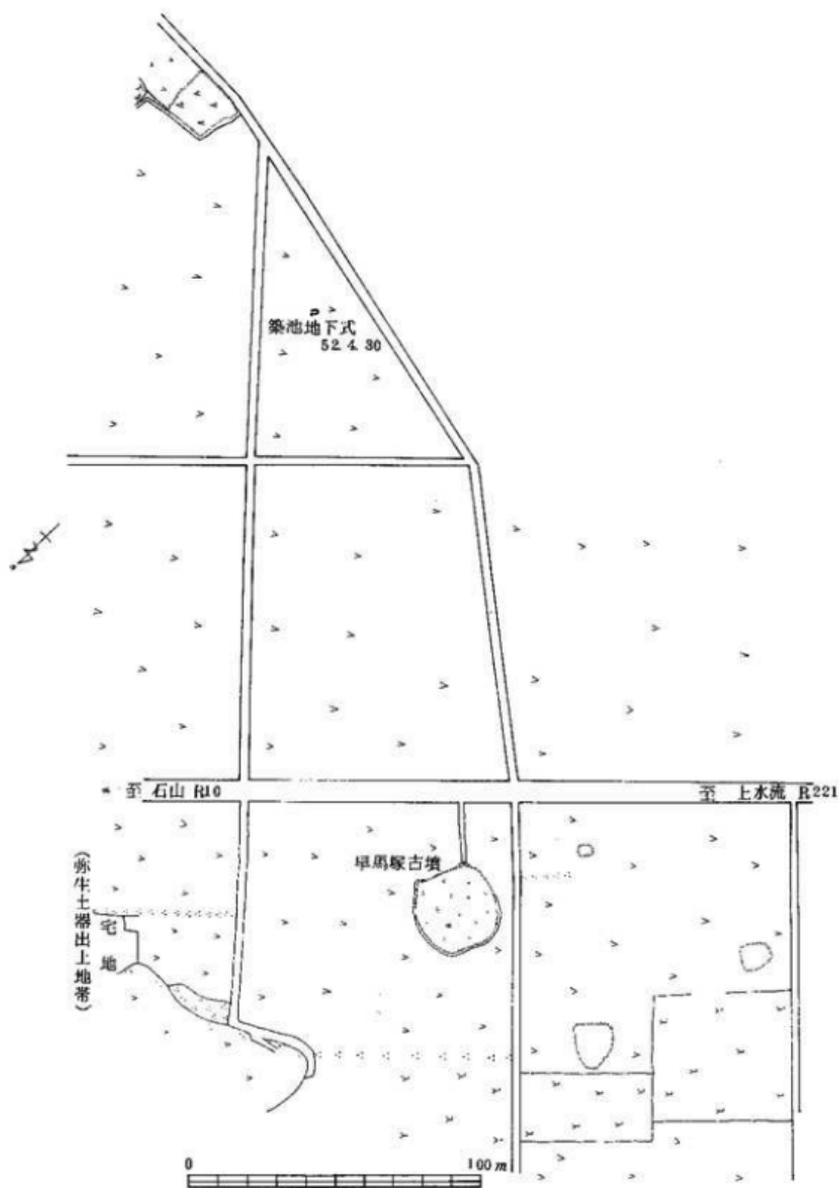
Ⅳ ま と め

諸県地方は、ボラ層中に主体部を持つ地下式古墳が多い。その中にはドーム形天井をもつものもあるが、今回調査分は壁面等の観察から寄棟造りと考えられそうである。また、主軸の長さ等から妻入りの方が妥当

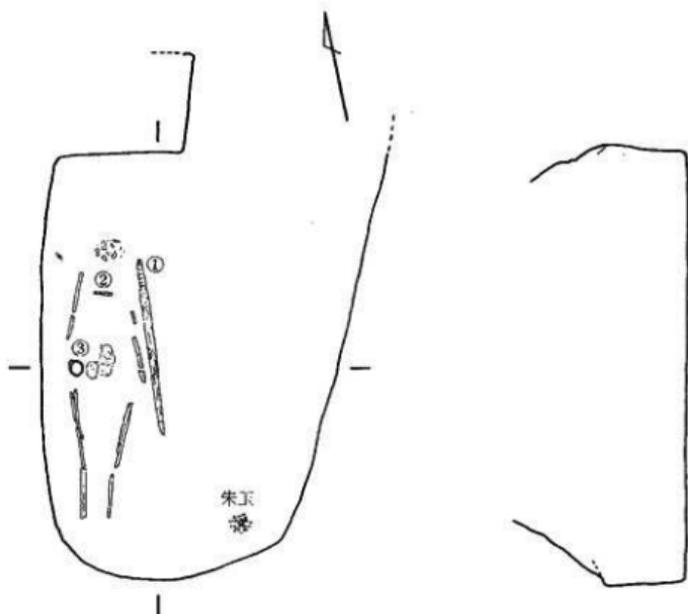
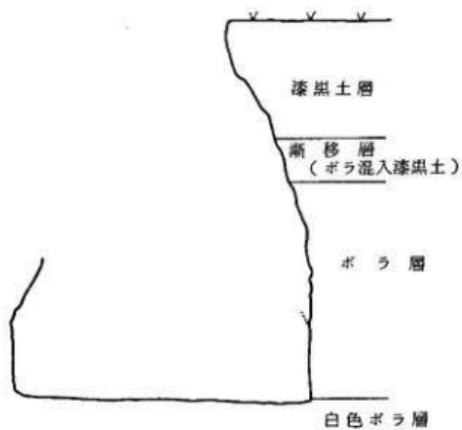
であろう。

副葬品の中で、鉄輪は高崎町塚原第 8 号から出ているが、構造が違い溢りも今回の方が精巧のように感じられる。発見例の少ない鉄輪については今後の検討を要する。 (岩永 哲夫)

*注。 宮崎県文化財調査報告書第 19 集 宮崎県教育委員会 昭和 52. 3. 31



第2圖 築池地下式古墳出土地点周辺図



第3図 築池地下式古墳実測図





(1)



(2)



(3)

- (1) 直刀
- (2) 刀子
- (3) 铁轮



第4图 副葬品示意图



(1)



(3)



(2)

築池地下式古墳副葬品

(1) 直刀 (2) 刀子 (3) 鉄輪

宮崎県文化財調査報告書
第20集

発行 昭和53年3月31日
宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課